

Bauddhakośa

Newsletter

no. 7

目次

活動報告

2017年度・バウッタコーシャ科研プロジェクト 公開シンポジウム報告	1
第63回 ICES シンポジウム V 「如来蔵とは何か—如来蔵・仏性思想研究の最前線—」報告	2
室寺研究班 2017年度～2018年度の研究遂行状況報告	4

記事

研究ノート

「ヴィナヤ文献における用語の定義的用例集の作成に向けて」(生野昌範)	8
「経典解釈に基づく仏教用語の訳語検討 —『瑜伽師地論』「撰異門分」に説かれる無常を例に一」(中山慧輝)	14
「仏教用語再訪—aprasaṅga, calita, 所依—」(堀内俊郎)	23
「『中観五蘊論』にもとづく仏教用語の定義的用例と現代語訳の検討 —五位七十五法対応語以外の重要語に関する研究成果の公開に向けて—」(横山剛)	28

活動報告

2017年度・バウッタコーシャ科研プロジェクト 公開シンポジウム報告

2017年11月25日(土)に、国際仏教学大学院大学・春日講堂において、『般若心経』を解体する—『般若心経』研究の最前線—と題するバウッタコーシャ科研公開シンポジウムを開催した。以下はその報告である。

この公開シンポジウムでは、共通テーマへの導入の意味もかねて、午後1時半から以下の3つの個人発表を行った。それぞれの発表について、会場からはいくつかの質問が寄せられ、活発な意見・情報交換をなす機会ともなった。

王俊淇(東京大学大学院生)「『プラサンナパダー』における『中論』偈頌の形態について」

楊潔(東京大学大学院生)「『瑜伽師地論』における五遍行中の思(cetanā)について」

石田尚敬(愛知学院大学専任講師)「インド仏教思想における基体・属性の理解—ダルマキールティの bhāvapratyaya 論とともに—」

その後、休憩をはさんで、午後3時半から共通テ

マに関する4つの発表に入った。その冒頭で、本公開シンポジウムの司会を務めた斎藤明(国際仏教学大学院大学教授)が、シンポジウムの趣旨と進行の段取りを説明するとともに、発表者の簡単な紹介を行った。

はじめに、渡邊章悟氏(東洋大学教授)が「『般若心経』のルーツと構成」と題して、『般若心経』の梵・蔵・漢諸本と拡大般若経との関連を再考した。とくに氏は、自ら公刊してきた関連論考をもふまえて、拡大般若経(『二万五千頌般若』他)と『般若心経』—とくに祖型である小本—との関係を空性表現に焦点を当てて詳論した。その上でまた氏は、小本を祖型として、拡大般若経の空性表現をさらに依用しながら、大本がいかに再構成されたかを論じた。

次に、落合俊典氏(国際仏教学大学院大学教授)が、「経録に見える般若心経」と題して、今なお議論が尽きない羅什訳『魔訶般若波羅蜜大明呪経』の成立に関して、同経を初めて記載する智昇撰『開元釈教録』(730年)、およびそれ以前の『出三蔵記集』(518年)から

『大周録』（695年）までの8つの経録における関連記載を比較考察した。氏によれば、それらの経録に載る「[魔訶] 般若波羅蜜神呪[経] 一卷」は羅什訳『魔訶般若波羅蜜大明呪経』に相当すると推定されるが、ただし羅什自らの訳本でなく、別人が大品般若経から「抄出、別生」する形で作成し、同じ訳者の羅什に仮託したという。また、従来から議論される、玄奘が西域において艱難に遭遇した際に読誦したと『慈恩伝』が伝える『般若心経』についても、この羅什仮託本と考えられるとした。

つづいて望月海慧氏（身延山大学教授）は、「インドにおける『般若心経』注釈書の系譜」と題して、いずれもチベット大蔵経に訳本として伝えられるインド撰述の8つの『般若心経』注釈を比較考察した。インド撰述とされる8つの注釈書はカマラシーラ、ヴィマラミトラ、シュリーシンハ・ヴァイローチャナ、ジュニャーナミトラ、プラシャストラセーナ、ディーパンカラシュリージュニャーナ（＝アティシャ）、シュリーマハージャナ、ヴァジュラパーニの著作とされる。氏は『般若心経』の構成理解、ディグナーガによる知覚と推理の二種の認識根拠、および『現観莊嚴論』に説かれる修行道に関する資糧道、加行道、見道、修道、無学道の五道説の適用などの視点から、これらの注釈文献相互の影響関係を論じた。

さらにまた斎藤明は、『般若心経』とアヴァローキテーシュヴァラ（観音/観自在）」と題して、小本およ

び大本『般若心経』とアヴァローキテーシュヴァラの関係性を再考した。斎藤は、自らの関連論考をもふまえ、両者の関係については、いずれも苦難に直面する有情の救済を主題とし、小本の冒頭部は梵天勸請説話におけるブッダの世間観察の場面と近似表現を下地にすることを窺わせ、また大本に付加された冒頭の「序分」箇所はブッダと説主アヴァローキテーシュヴァラとの関係（同経注釈者の表現をとれば、後者がブッダの「変化身」である点）を示すことを論じた。

時間の制約があったものの、それぞれの発表について、発表者と参加者との間で活発な質疑応答が繰り広げられ、また実りの多い意見・情報交換ができたように思う。本公開シンポジウムは100名余りの参会者を得て、終了後には続篇を期待する声も寄せられていた。

（斎藤 明）



2017年度公開シンポジウム 会場の様子

第63回 ICES シンポジウム「如来蔵とは何か—如来蔵・仏性思想研究の最前線—」報告 2018.5.19（東方学会主催、於日本教育会館）

斎藤 明（国際仏教学大学院大学・教授）

如来蔵・仏性説は大乗仏教を代表する仏教思想の一つである。如来蔵思想研究については、およそ半世紀にわたり、高崎直道による『宝性論』の英訳注研究、ならびに『如来蔵思想の形成』とその関連業績が内外の研究を主導してきた。この間、高崎自身による研究の進展とともに、中村瑞隆、D. Seyfort Rugg, L. Schmithausen による関連研究、原実の garbha 研究、下田正弘による『大乘涅槃経』の研究と『如来蔵と仏性』（シリーズ大乗仏教8）の編纂を通じた如来蔵・仏性思想研究の総括的諸論考、M. Zimmermann による『如来蔵経』に関する一連の研究、加納和雄による『宝

性論』のインドからチベットへの伝承に関する研究が注目される。また、松本史朗による如来蔵思想に対する一連の批判的研究も記憶に新しい。近年はまた、M. Radich や Chr. Jones による最新の成果も注目される。これと並行してまた、東アジア仏教研究の分野においても、如来蔵説に深く関係する『大乘起信論』と地論宗の研究、『大乘涅槃経』と涅槃宗の研究なども進展を見せている。

本シンポジウムは、以上のような近年の研究史をふまえたうえで、如来蔵・仏性思想研究の最先端の状況を紹介・発表し、忌憚のない質疑応答と議論をもとに、

あらためて「如来蔵」とは何かを検証するために、斎藤明（国際仏教学大学院大学教授）と下田正弘（東京大学教授）がコンヴィーナートとなって企画された。

はじめに司会の斎藤が、以上のような趣旨説明と進行の段取りを説明した。その上でまず斎藤明は、『宝性論』の *tathāgatagarbha*（如来蔵）解釈考」と題する発表を行った。『宝性論』は、「如来蔵」(*tathāgata-garbha*)の合成語解釈を示す貴重な論書である。「すべての有情は如来蔵である。」と宣言したのは『如来蔵経』であるが、同経はこの合成語そのものを分析的に解説することはなく、九つの譬喩をもって宣言の意図を説明する。これに対して、『宝性論』はこの「すべての有情は如来蔵である。」という一文の解釈を中心に、三宝出現の原因としての如来蔵を直接のテーマとして詳論する。すなわち、この一文内の「如来蔵」の語を（一）法身、（二）真如、（三）種性の三つの観点から捉え、この合成語に対して格限定複合語（一）と所有複合語（二）（三）の解釈を提示し、詳説する。斎藤によれば、これら三種類の解釈を包括する「如来蔵」の語意は「如来の胎児」であり、この解釈は『宝性論』のみならず、『如来蔵経』の当該の一文解釈（「すべての有情は如来の胎児である。」）にも通底するとし、「如来を内（＝胎）に宿している」に代表される従来の「如来蔵」解釈に再考を促した。

次に、下田正弘氏は、「佛典における言説の様相の差異と如来蔵思想の解釈」と題して発表を行った。氏はまず「如来蔵」思想解釈のための八つの要件を提示し、その上で、『宝性論』に体系化された明示的説明、如来蔵思想の起源としての諸大乘経典、『涅槃経』内部の二類と同経 → 『如来蔵経』 → 『勝鬘経』『不増不減経』 → 『宝性論』という歴史的経緯、大衆部系アピダルマにみる関連思想を顧慮することの必要性を、具体例を挙げながら詳説した。その上で氏は、如来蔵思想の評価として、（一）二元論（仏と衆生の視座）の重要性、（二）書記経典の出現と言説の自存的現実化、（三）神義論としての意義、の三点を指摘して発表を結んだ。

午後に入って、まず Michael Zimmermann 氏（ハンブルク大学教授）が「マルチ連想語としての如来蔵一なにゆえ「如来蔵」の意味と起源は単一でないのか一」（英文）と題する発表を行った。氏はまず、近年の研究成果一とくに M. Radich による『涅槃経』に関する研究（同経は『如来蔵経』に先行するという新説

を提起）一を紹介したうえで、氏自身が手掛けた『如来蔵経』の九喩のもつ意味を考察した。その上で氏は、第一喩（萎えた蓮華の中に座す如来）を例として、同経の宣言文は、「如来を内にい置く」という意味をもつ所有複合語として解釈されると結論した。この解釈は、高崎氏の「如来蔵」解釈に一致する。

続いて、加納和雄氏（駒澤大学専任講師）は、『大般涅槃経』梵文断片における如来蔵の使用例とその再検討」と題して、『大般涅槃経』のサンスクリット語写本断片における *tathāgatagarbha*（如来蔵）の使用例を具体的に考証した。とくに氏は、如来蔵宣言文を出す『如来蔵経』と、一部が梵文残簡中に確認される『涅槃経』の用例を対比し、「一切衆生は如来を宿す」との解釈がふさわしい前者と、「一切衆生には如来蔵がある」を典例とする後者との差異に着目し詳論した。氏はその上で、『涅槃経』において *tathāgatagarbha*（仏塔）と *buddhadhātu*（舍利）が等価になるという理解を提示し、考察を加えた。

最後に、Christopher V. Jones 氏（オクスフォード大学フェロー）は、「ダートウ (*dhātu* 界) 論説一「本質」「essence」の意味での「如来蔵」再評価一」（英文）と題して、『如来蔵経』および『涅槃経』を中心に、「如来蔵」「仏性」説に深く関わる *dhātu*（界、性）の用例に着目し、考察を加えた。氏は同語を「本質」「essence」の意味で解釈することに焦点をあて、『如来蔵経』『涅槃経』他の如来蔵系諸経典の用例を精査し、あわせて『宝性論』の構成に分析を加えた。

五つの発表を終えた後に、下田正弘がそれぞれの発表に対するコメントを寄せ、それをも踏まえて、約四十分余り、参会者からの質問をもとに、シンポジウムの全体テーマ、および個別の研究発表をめぐって、活発で有意義な討議を行った。本シンポジウムは「パウダコーシャの新展開一仏教用語の日英基準訳語集の構築一」（研究代表者・斎藤明）と題する科学研究費補助金・基盤研究 (A) によるこれまで研究成果の一端を公開し、関連する諸問題を討議するという目的を併せもつものであった。九十名余りの参会者を得て、また質疑応答に比較的多くの時間を割いたこともあり、実り多いシンポジウムになったと言えようか。終了後の懇親会では、発表者と複数の参会者から、近い将来ぜひこの続篇をとという期待が寄せられていた。

室寺研究班 2017 年度～2018 年度の研究遂行状況報告

(代表) 室寺義仁、(研究協力者) 岡田英作・高務祐輝・中山慧輝

2017 年 3 月、『瑜伽師地論』における五位百法対応語ならびに十二支縁起項目語についての研究成果を“Buddhakośa V”として、JSPS 科研費・基盤研究(A) (科研番号: 16H01901、平成 28～30 年度、代表者: 斎藤明・国際仏教学大学院大学教授) の共同研究支援体制の許、公表することができました。その後の研究遂行状況について簡潔に報告したいと思います。

既刊“Buddhakośa V”の「はじめに／Preface」の中で、例えば、次の様に述べました。

『瑜伽師地論』に見られる訳語決定に有用な用例は、『縁起経』(Pratītyasamutpādasūtra、ただし、略称。ヴァスバンドゥが挙げる経題は、Pratītyasamutpādādivibhaṅganirdeśasūtra) で説かれる各用語に対する個別解説(vibhaṅga)を前提としており、『瑜伽師地論』「有尋有伺等三地」の中において、『縁起経』の経句としての個別解説それぞれに対し、論書における固有の個別解説が加えられており、この個別解説をもって『瑜伽師地論』における定義的用例として見做し得る。

この事例と同様に、『瑜伽師地論』「撰異門分」(Paryāya-saṃgrahaṇī) に伝わる(伝承の共有と合意を前提とした、同論編纂者たちにとっての周知の「経」に伝わる)経句に対する解説もまた、『瑜伽師地論』における定義的用例と見做すことが出来ます。ただ、歴史文献学上の大きな問題点の一つとして、同論当該箇所伝わる経句が、多くの場合、我々の知り得る限りの現存文献群(パーリ・漢訳・チベット訳の各大蔵経)に、文言通り完全に合致する形では確認できないという事実があります。そして、そもそも、サンスクリット原典がまとまって伝わっていない箇所に当たるため、「撰異門分」に対する研究は進展していない現状にあります。

とは言え、この四半世紀余りに亘り、「撰異門分」に関連する文献学的研究の新たな展開を先導して来たのは日本人研究者たちであり、その代表的な論考は下記の三篇かと思われます。すなわち、

松田和信「『瑜伽論』「撰異門分」の梵文断簡」『印度哲学仏教学』第 9 号 90-108 頁、1994 年。以下、松田(1994)と略記。

向井亮「『瑜伽師地論』「撰積分」「撰異門分」の結構—uddāna 頌による科判—」『今西順吉教授還暦記念論集インド思想と仏教文化』(369)–(380) 頁、1996 年。以下、向井(1996)と略記。

袴谷憲昭「実修行派の経典背景の一実例」『唯識文献研究』576–604 頁、2008 年。以下、袴谷(2008)と略記(ただし、初出は 2006 年)。

さて、これらの諸研究成果を学的営為の頼りとして、古典インドの瑜伽行派(Yogācāra)の流れに属する仏教徒の中では、どのように、仏教教義を前提とする、宗教的瞑想としてのヨーガの実践が行われていたのか、換言すれば、古典インド(例えば、『バガヴァット・ギーター』の中で)の言葉を借りて簡潔に表現するならば、‘jñānayoga’の実践において、‘jñāna’即「知識」を、どのような形(ākāra)へと作り為そうとする(abhisamṣvkr)のか、あるいはまた、我々の研究課題としての言葉で表現するならば、仏教用語の定義的用例として、一般用語(例えば、生死)の語義についての仏教的意味付けの標準化を行おうとするのか。このような意味での課題について、「撰異門分」に伝わる一つ一つの「経句」に対し、歴史文献資料に確認できる限りで、当該「経句」を伝える「経」を確認しつつ、同論書に特有と思われる解説を分析し、引続き、『瑜伽師地論』における仏教用語の定義的用例についての研究の進展に寄与したいとの思いで研究の遂行に努めています。まず、「撰異門分」の中で標準される「経句」の用語は、向井(1996)において整理された項目語で列挙すると下記の通りです。「白品」と「黒品」に大きく二分された上で、

I. 「白品」

1. 師、2. 第一、3. 二慧、4. 四種善説、5. 有因縁、6. 施、7. 戒(7.1-4)：尸羅・法・殺生・具戒、8. 道(8.1-7)：念住・正断・神足・根・力・覺支・道支・無量(8.8:) (A 1-15:) 智・宣説・善・欲・熾然・独・遠塵・病・解釈・我・断・生尽・并天世衆生・依・我作、(B 1-10:) 如来・無常想・底沙・怖・無為・不有・不相続・空・無常・無余、(C 1-9:) 欲三種・延請・法・僧・惠施・厭・梵志・無常・聚沫。

II. 「黒品」

1. 生、2. 老、3. 死、4. 蔵、5. 加喜、6. 煩惱、7. 貪瞋癡、8. 少、9. 差別。(以上、60の用語。)

これらの用語解説の中で(ただし、道(8.2-7)の詳細は、順次、「声聞地」「撰決撰分」「菩薩地」の「如し」とされ、七覚支に対する解説はありますが、道支の八正道に対する解説も又、正見から正念などの一部解説の他は「声聞地」の「如し」とされ、「撰異門分」での詳しい解説はありませんが)、サンスクリット原文を唯一参照できるのは、松田(1994)によって、カトマンドゥの国立公文書館に所蔵される断簡の一部(1葉)が「撰異門分」断簡に当たることが初めて比定された箇所のみです。松田(1994)の中で、当該断簡について、ローマ字転写とともに校訂テキストが提示され、その内容分析が行われています。上掲の列挙項目語で言えば、「白品」末の「聚沫」後半箇所から、「黒品」の「加喜」中途までに当たります。この中、「聚沫」との経句用語を伝える経、すなわち、『泡沫(phenapiṇḍa)経』を主たる事例として、瑜伽行派における実修内容としての「経典背景」を探索する論者が、袴谷(2008)です。

現在私たちが解説作業を進めているのは、経句用語として、2度に亘って標挙される「無常」(anitya,あるいは、anityaとanityatā)の語と「無常想」(anityasamjñā)、並びに、「聚沫」、そして、「生」「老」「死」について解説する7箇所についてです。これらの項目語をまずもって分析対象語として選択したのは、特に、「無常」「生」「老」「死」の4項目語は、すでに公表している“Bauddhakośa V”においても取り扱っており、少なくとも、『瑜伽師地論』「本地分」中「有尋有伺等三地」における「十二支縁起」の各項目語に対する個別解釈と比較吟味できる用語であり、併せて、仏教教義の根幹たる「苦諦」観察の要点でもあると考えるからです。

その中、「老」に対する『瑜伽師地論』「撰異門分」に固有の解説、並びに、伝承句を紹介したいと思いません。興味深いことに、「老いとは、禿ること、白髪になること」(jarā khālatyā pālitā)などという語で始まる古典インド一般の説明を(vid. Apte Dic. etc.、なお、ヴァスバンドゥが注解対象本文とする『縁起経』でも、‘khālatyā’の語から始まりますが、この語を第一に)採用することなく、年齢を重ねた人は、歩いているとき、躓き・倒れる、白髪が交じり、皺がよるも

のだと、歩行中「躓く」(√skhal)との語を真っ先に挙げます。この伝承は、「本地分」に伝わる『縁起経』と合致します。確かに、√khalと√skhalは音として近似しているため、口承伝承過程における交代(暗誦者が語る√khalを、筆授者が√skhalと理解したことに始まる交代)を想定することもできますが、語義はまったく異なります。老いを「躓く」という行為をもって、あるいは、経験知をもって解説するところにこそ、『瑜伽師地論』に特有な定義的用例を見出すことができるように思います。

原文テキストについては、松田(1994)98頁を参照していただきたいと思えます。ただし、校訂テキスト§II.2の冒頭語‘khālitayam」を‘skhālitayam」に、また、第5句‘bhagnatā」を‘magnatā」修正し(両語については、“Bauddhakośa V” p. 165を参照)、そして、末尾の一文、“teṣām evānyathārtham”を“teṣām evānyathātvaṃ”と修正した上での仮訳です。「老」についての『瑜伽師地論』に伝わる『縁起経』経句に対する解説となっていますが、「老」解説の経句、全18語句について『縁起経』の中で標挙される経句順で、冒頭からの6句を、最初の3句、続く3句と、3句毎のまとまりある意味内容をもった経句と理解し、第6句の意味を第9・10句と経中に連なる経句の意味で理解しています。この第6・9・10句に続き第7句を挙げますが、第8句「身体がぜえぜえと息を吐くこと」(khulakhula-praśvāsa-kāyatā)に対する解説はありません。第11・12句を、老化に伴う、立ち振る舞いの挙動についての不十分さの意味で、第13・14句を、認知能力についての不十分さ・減衰の意味で、第15・16句を感覚能力についての老熟・損壊の意味で、そして、第17・18句は、感覚器官は、サンスカーラ/形成力とは、謂わば別時別住する器官であり、その諸器官の変化の意味で、それぞれ一対の語句として理解された解説が行われます。このような解説の仕方は、「本地分」での経句一々に対して個別解説を行う仕方とは大きく異なります。相互に参照されているとは考えられません。その一つの理由として、縁起解説と苦諦解説という文脈上の大きな違いがあることが推察されます。では最後に、「撰異門分」における「老」の定義的用例の仮訳を挙げて研究遂行状況報告とします。

【定義的用例】〔「生」「老」「死」という「苦諦」の文脈の中での〕—老い—（仮訳）

(1) “躓くこと”とは、年齢を重ねた人が歩行中に躓き転倒するとき〔の場合の、躓くことである〕。(2) “白髪交じりになること”とは、黄金色がかった白色の色から、髪毛体毛の色落ちである。(3) “皺がよること”とは、皮膚が縮むことである。(4) “老衰したこと”とは、年齢を重ねたその人の皮膚の黄疸性であり、熱量衰減性である。(5) “気落ちしていること”とは、スタミナ力・勇健さなきことである。(6) “曲がった梁のように湾曲していること”とは、前屈みに(9) “前方に身体が曲がること”であり、(10) “杖に支えられていること”である。(7) “体に黒いシミが重なること”とは、諸々の黒斑が染みついた体のことである。(11) “遅鈍なこと”とは、しかじかと為すべき起立・歩行などの場合における不十分さである。(12) “朦

朧なこと”とは、諸感官の対象に対する不十分さである。(13) “減退すること”とは、記憶や理解などについての不十分さである。(14) “すっかり減退すること”とは、この同じ〔年齢を重ねた人の〕諸感官のそのそれぞれの〔対象の〕須臾に刹那に過ぎ去り行くことに因る、〔記憶や理解などが〕失われることである。(15) “諸々の〔感覚〕能力がすっかり成熟すること”とは、まさにその諸々〔の感覚能力〕が(16) “すっかり損壊すること”である。(17) “諸々の形成力が老い朽ちること”とは、諸々の感覚器官 (indriyādhiṣṭhāna) が別の時間〔の流れ〕にとどまっていること (kālantaraparivāsa) である。(18) “老いさらばえること”とは、まさにその諸々〔の感覚器官〕が変化することである。

(室寺 記)

記事

平成 29 年度第 1 回全体研究会

2017 年 7 月 29 日 (土) 15:00 ~ 19:00

於 東京大学仏教青年会ホール

1. 研究代表者より、これまでの研究実績と成果刊行について説明がなされた。
2. 研究分担者より、各研究班における研究の現況と今後の研究計画について報告がなされた。
3. 研究代表者・研究分担者より、研究組織の改変について説明がなされた。
4. 研究協力者より、研究発表がなされた。発表者と標題は以下の通り。
 - ・横山 剛
『『中観五蘊論』に説かれる有部説の帰属をめぐって』
 - ・岡田 英作
『『瑜伽師地論』における同義異語による種姓の規定』
 - ・斎藤 明
「prajñā/pañña 再考」
5. 上記の発表に関して、討論と総括が行われた。

平成 29 年度第 2 回全体研究会

2018 年 3 月 10 日 (土) 14:30 ~ 19:00

於 国際仏教学大学院大学 2 階 大講義室

1. 研究代表者より、今年度の研究実績と成果刊行につ

いて説明がなされた。

2. 研究分担者より、各研究班における今年度の研究実績および次年度の研究計画について報告がなされた。
3. 研究代表者・研究分担者より、次年度の研究組織について説明がなされた。
4. 連携研究者・研究協力者より、研究発表がなされた。発表者と標題は以下の通り。
 - ・横山 剛
「ダシャバラシュリーミトラ著『有為無為決択』第九章が伝える有部の法体系について」
 - ・清水 尚史
『『五蘊論』スティラマティ釈の注釈傾向について—『阿毘達磨集論』との関係を中心として—」
 - ・生野 昌範
「アメリカ合衆国ヴァージニア州のプライベート・コレクションにおける新出サンスクリット語写本断簡集—内容、及びそこに見られる用語の定義的記述—」
 - ・石井 公成
「ローマ字表記の“Zen”の登場」
5. 上記の発表に関して、討論と総括が行われた。

平成30年度第1回全体研究会

2018年7月21日(土) 14:00～19:00

於 国際仏教学大学院大学2階 大講義室

1. 研究代表者より、これまでの研究実績と成果刊行について報告がなされた。
2. 研究分担者より、各研究班における研究の現況と本年度の研究計画について報告がなされた。
3. 研究代表者・研究分担者より、研究組織の改変について説明がなされた。
4. 研究協力者より、研究発表がなされた。発表者と標題は以下の通り。

- ・堀内 俊郎

- 「誤伝の解釈学—瑜伽行派の文献から—」

- ・生野 昌範

- 「トカラ語文献のつたえる仏伝」

- ・中山 慧輝

- 「無常と苦しみの関係—『瑜伽師地論』『声聞地』と「撰異門分」との比較を通して—」

- ・横山 剛

- 「『中観五蘊論』の法体系における五位七十五法対応語を除く重要語—研究の現状報告と成果の刊行に向けて—」

- ・菊谷 竜太

- 「インド密教における術語の収集にあたって—アバヤーカラグプタの『アームナーヤマンジャリー』とプトウンの『サンプタ広注』について」

5. 上記の発表に関して、討論と総括が行われた。

ワークショップのお知らせ

4th International Workshop on Madhyamaka Studies (IWMS2018)

“Linguistic Challenges: Mādhyamikas and their Key Words”

1st Circular

We are pleased to announce that the 4th International Workshop on Madhyamaka Studies will be held on December 1st Saturday and 2nd Sunday, 2018, at the International College for Postgraduate Buddhist Studies (ICPBS) in Tokyo. Following the three previous Workshops held in Tokyo 2015, Kyoto 2016, and Hangzhou 2017, this Workshop will be focused on the Mādhyamikas' key words. The topic of the IWMS2018 will cover the wide range of the meanings of those key words, as they were used by Indian, Tibetan, and occasionally Chinese Mādhyamikas. A comparative approach to those key words will be also welcome. We are pleased to invite scholars and students who are interested in this topic to take part in this discussion, to deepen our knowledge of these key words by exchanging questions and answers, comments, and information about related studies.

If you would like to contribute a paper to the IWMS2018, please contact Akira Saito by email (asaito@l.u-tokyo.ac.jp) with the title and abstract of your paper no later than October 8th.

Akira Saito (International College for Postgraduate Buddhist Studies), Convener,
August 1st, 2018.

in cooperation with
Shoryu Katsura (Ryukoku University, Convener of 2nd IWMS)

He Huanhuan (Zhejiang University, Convener of 3rd IWMS)

Dates: December 1st and 2nd, 2018.

Venue: The 1st Lecture Room (2F), International College for Postgraduate Buddhist Studies. 2-8-9 Kasuga, Bunkyo-ku, Tokyo, 112-0003, Japan.

Application: Application to read a paper or attend the workshop should be sent to Akira Saito (asaito@l.u-tokyo.ac.jp) by October 8th.

Abstract: All applicants wishing to read a paper are requested to send an abstract of no more than 400 words by October 8th to the above email address.

Accommodation: Hotel Reservation near the venue will be arranged upon request.

Inquiry: For all particulars, please address inquiries to Masanori Shono (JZJ01027@nifty.com)

研究ノート

ヴィナヤ文献における用語の定義的用例集の作成に向けて

生野 昌範

(国際仏教学大学院大学・特任研究員)

部派仏教においては仏陀の説法としての経典を集めた経蔵、仏教僧団の規律や比丘・比丘尼などにとっての行動規則を集めた律蔵、経典の解釈や教理学説を整理編集した論蔵という三蔵が各部派に存在していたと考えられている。それゆえ、三蔵を構成する内の一つである律蔵、ヴィナヤ文献もバウツダコーシャ・プロジェクトの検討対象に含まれるが、ヴィナヤ文献に関する用語の定義的用例集の作成に向けた準備は現在までほとんど何も行われていない。そこで、将来ヴィナヤ文献における用語の定義的用例集を作成しようとした場合に、どのような問題が見込まれ、どのように準備を進めるべきかという手順に関して予想してみたい。ここに述べる予想は、予備的調査の段階のものである¹。

1 見出し語とする用語の選定

バウツダコーシャ・プロジェクトは、説一切有部の「五位七十五法」、あるいはそれに準じた、もしくは発展させた法体系を検討対象として今まで進められてきた。しかし、ヴィナヤ文献には、「五位七十五法」などの法体系に相応するような術語に関する体系は存在しない。従って、ヴィナヤ文献における用語の定義的用例集を作成するためには、先ずヴィナヤ文献における用語の選定を行う必要がある。その際、先行研究を参考にしつつ選定が行われるべきであるが、参考としうる先行研究としては UPASAK 1975、並びに NoLOT 1996、1999 が挙げられうる。

2 用語自体の相違

ヴィナヤ文献は、仏教内の種々の部派に属するテキストが現存しており、サンスクリット語、パーリ語、古典チベット語、古典中国語（漢文）などによって伝えられている。ヴィナヤ文献にはこのように種々のテキストが現存するが、そのことが用語の定義的用例集を作成することにとって困難をもたらすという例を一つ取り上げてみたい。

ヴィナヤ文献の内には比丘や比丘尼にとっての五種類あるいは七種類の罪が規定されているが、その内で二番目に重い罪の種類はインド語だけに限定してもサンスクリット語で *saṃghāvaśeṣa-* と *saṃghātiśeṣa-*、またパーリ語で *saṃghādisesa-* があり²、用語そのものに相違が見られる。この場合に、私たちが選択する方法として、以下の二つが予想されうる。一つの方法はこれら全ての用語をそれぞれに取り扱い併記するというものであり³、もう一つの方法はどれか一つの用語に限定した上で取り扱うという方法である。プロジェクトとして実施する場合には期間が設定されるので、後者、どれか一つの用語に限定して取り扱うという方法を採用することが現実的であるように思われる。もしどれか一つの用語に限定する場合には、その他全ての用語に関してもその限定された用語を記述している文献だけを用いて検討する必要があるおのずから生じる。そして、文献を限定するという方法を選択する場合には、パーリ語による文献が定義的用例を最も多く伝え

¹ 本稿における資料は、2007–2010 年度科学研究費補助金・基盤研究 (A) 「仏教用語の『日英基準訳語集』構築に向けての総合的研究」(代表：斎藤明) の内の榎本研究室において 2009 年度に筆者が収集した資料に基づく。

² Cf. NoLOT 1987.

³ これら三つの用語に基づいて共通する原語を突き止め、その原語における言語的説明を加えるということは、バウツダコーシャ・プロジェクトの目的の範囲を越えている。

⁴ たとえば *saṃghāvaśeṣa-* という術語は単語としてはサンスクリット語でも現存しているが、それに対する定義的用例の箇所はチベット訳と漢訳でしか現存しない。それに比べて、パーリ文献はヴィナヤ聖典とそれに対する注釈文献、並びに復注文献が利用可能である。また、一般的な傾向として、チベット訳や漢訳において音写語の場合は翻訳された元の原語を想定しうる場合もあるが、意味からの翻訳語の場合は翻訳語そのものだけから正確な原語を想定することは難

ている⁴ので、パーリ語による文献を選択するのが適当であると考えられる⁵。

パーリ語によるヴィナヤ文献における *saṃghādisesa-* の定義的用例を以下に引用する⁶。

saṃghādiseso ti: saṃgho 'va tassā āpattiya parivāsaṃ deti mūlaya paṭikassati mānattaṃ deti abbheti, na sambahulā na ekapuggalo, tena vuccati saṃghādiseso ti.

「サンガーディセーサ」とは。僧団こそがその罪のためにパリヴァーサ⁷を与え、元に引き戻し⁸、マーナッタ⁹を与え、呼び戻す（復帰させる）。多くの者たちがでもなく、一個人がでもない。それゆえ、「サンガーディセーサ」と言われる。(Vin III 112.26–28; V 148.17–19)

vacanattho pan' ettha saṅgho ādimhi c' eva sese ca icchitabbo assā ti saṅghādiseso. kiṃ vuttaṃ hoti? imaṃ āpattiṃ āpajjitvā vuṭṭhātukāmassa yaṃ taṃ āpattivuṭṭhānaṃ tassa ādimhi c' eva parivāsādānathāya, ādito sese majjhe mānattadānathāya mūlaya paṭikassanena vā saha mānattadānathāya, avasāne abbhānathāya ca saṅgho icchitabbo. na h' ettha ekam pi kammaṃ vinā saṅghena sakkā kātuṃ. iti saṅgho ādimhi c' eva sese ca icchitabbo assā ti saṅghādiseso ti.

しかし、これに関して言葉の意味は、僧団がこれ（サンガーディセーサ）にとって¹⁰まさに始めにおいてと残りにおいて求められるべきであるので、サンガーディセーサである。何が言われているのか？この罪を犯した後に、[そ

の罪から] 立ち出ることを望んでいる者に、その罪から立ち出ること、そのことのまさに始めにおいてパリヴァーサを与えるために、始めから残りにおける中間においてマーナッタを与えるために、あるいは元に引き戻すことと共にマーナッタを与えるために、そして終わりにおいて呼び戻す（復帰させる）ために、僧団が求められるべきである。というのも、この内のただ一つの[法的]行為も僧団なしでは行なわれることはできないので。以上のように、僧団がこれ（サンガーディセーサ）にとってまさに始めにおいてと残りにおいて求められるべきであるので、サンガーディセーサである、と[言われている]。(Sp 522.2–10; Kkh (re-ed.) 57.23–58.6)

ヴィナヤ聖典と二つの注釈文献における *saṃghādisesa-* の定義的用例は以上の通りである。このうち注釈文献における用例からはサンガーディセーサは「僧団が始めにおいてと残りにおいて[求められるべき]もの」を意味し、この語は一文の内の幾つかの要素を複合語として用いているもの¹¹として解されうる。

また、この例から一つ言及しうることは、サンガーディセーサを見出し語として取り上げた場合には、その語に関連するパリヴァーサやマーナッタなどの術語も見出し語として取り上げ、それらの語に対する定義的用例を提示する必要があるということである。従って、ある用語の選定がそれに関連する用語をさらに見出し語として選定することを要求する場合がある。さ

しいということも指摘されうる。

⁵ パーリ語文献の内でも取り扱うテキストの範囲を明確にする、もしくは限定する必要があるが、少なくともヴィナヤ聖典である *Vinayapīṭaka* と注釈文献である *Samantapāsādikā* 並びに *Kaṅkhāvitarāṇī* は取り扱うべきであると予想される。さらに、*Samantapāsādikā* に対する復注として *Vajrabuddhīṭikā*、*Sāratthadīpanī*、*Samantapāsādikā-atthayojanā* の少なくとも3つが存在し、*Kaṅkhāvitarāṇī* に対する復注として *Kaṅkhāvitarāṇīporāṇaṭīkā*、*Vinayatthamañjūsā* の少なくとも2つが存在するが、それらの復注全て、もしくは一部を取り扱うかどうかは本格的な調査を実際に開始した後に検討されるべきである。

⁶ 今は予備的調査の段階にあるので、用語を日本語に翻訳することはせずに、カタカナで表記する。

⁷ サンガーディセーサを犯した後に意図的に隠していた日数と同じ期間のあいだ科せられる懲罰であり [Vin II 55.14–39, 58.10–31, etc.]、その期間中は特別な行動規則が適用される [Vin II 31.3–33.31]。

⁸ パリヴァーサやマーナッタを科せられている期間中に再びサンガーディセーサを犯した場合に、それに対する懲罰を始めからやり直すこと [Vin II 43.18–45.17]。

⁹ サンガーディセーサに対して六夜のあいだ科される懲罰のことであり [Vin II 38.3–39.14, etc.]、その期間中はパリヴァーサと同じく特別な行動規則が適用される [Vin II 35.11–36.16]。

¹⁰ 『『これによって』とは、この罪の部類にとって、である (assā ti assa āpattinikāyassa)」(Chattā Saṅgāyana Tipīṭaka 4.0: *Sāratthadīpanī* (Myanmar 2.314); *Kaṅkhāvitarāṇīporāṇaṭīkā* (Myanmar 227)).

¹¹ WHITNEY 1889, § 1314b; AiG II,1, § 123 (esp. b; cβ).

らに、その場合に、関連する語であるパリヴァーサやマーナッタなどをサンガーディセーサと同列の見出し語として扱うのか、あるいはサンガーディセーサの低位区分の見出し語として提示するのかということも考慮されるべき点であろうが、これに関しては本格的な調査をまって決定されるべきであろう。

3 用語の原義ではないとされる定義的用例

比丘や比丘尼にとっての最も重い罪の種類そのもの、もしくはその罪の種類を規定する学処、あるいはその罪の種類を犯した者は、パーリ文献において *pārājika-* と言われている。現在有力な説としては、この語は *parā-√aj* の派生語であると考えられている¹²。しかし、この説の根拠はこの単語に関して ‘eine sprachliche wie sachliche befriedigende ... Deutung’¹³ であるということであり、*parā-√aj* からの派生を支持する定義的用例が存在するわけではない¹⁴。

一方、*pārājika-* を *parā-√ji* から説明する定義的用例が存在するので、以下にその定義的用例の一部を引用する。

pārājiko ti parājito parājayam āpanno. ayam hi pārājkasaddo sikkhāpadāpattipuggalesu vattati. ... tattha sikkhāpadam yo tam atikkamati tam parājeti, tasmā pārājikan ti vuccati. āpatti pana yo nam ajjhāpajjati tam parājeti, tasmā pārājikā ti vuccati. puggalo yasmā parājito parājayam āpanno, tasmā pārājiko ti vuccati.

パーラージカな者とは、打ち負かされた者、打ち負かしへ陥った者である。というのも、このパーラージカという語は、学処・罪・人に関して機能するので。……その内、学処が、それに違反する者、その者を打ち負かす、それゆえパーラージカの [学処] (n.) と言われる。一方、罪が、それを犯す者、その者を打ち負かす、それゆえパーラージカの [罪] (f.) と言われる。人が打ち負かされ、打ち負かしへ陥ってしまっているので、それゆえパーラージカの [人] (m.) と言われる。(Sp 259.17–260.21, cf. Kkh (re-ed.) 34.15)

以上のように *pārājika-* の場合は、有力な説として想定されている原義と文献に実際に記述される定義的用例とが合致していない。このような場合に、私たちは一体どのように対処するべきであろうか。

斎藤教授の述べられている「術語の意味をそれぞれの文脈において再検証し、その上で、……これらの術語を現代語として蘇生させるという試みはきわめて重要な意味をもつ……そしてまた、術語の現代語訳を考えるうえで、とりわけ重要な意味をもつのが、当該の術語が用いられる文脈であり、主要な用例であることは論をまたない。定義的ともいえる主要な用例を根拠にして、今あらためて仏教用語の現代語訳を問う」¹⁵、あるいは「同じ術語であっても初期仏教、大乘仏教、あるいはまた後代の発展した用例や文脈においては、異なる訳語が求められることもしばしばある」¹⁶を参考にすると、術語に時代的変遷が見られる場合であっても、検討対象としているテキストにおいて実際に用いられている術語の使用例に基づいて訳語を決定すると

¹² VON HINÜBER 1985, p. 62; 1988, p. 3, n. 2; 1995, p. 9, n. 9; 1996, p. 10, § 17.

¹³ VON HINÜBER 1985, p. 62.

¹⁴ *pārājika-* の説明をしている「正しい者たちの諸々の教えから外れ、失敗し、逸脱し、排除／拒否された者 (cuto ‘paraddho bhāttho ca saddhammehi niraṃkato)」(Vin V 148.15, cf. Sp 1351.20–21) という箇所が *parā-√aj* からの派生を示しているかもしれない [VON HINÜBER 1995, p. 9, n. 9] と見なすことができるのかどうかは判断しがたい。それに類似した説明が大衆部説出世部所属の *Bhikṣuṇīvinaya* にもあるが、そこでは *√aj* からではなく、(*pāra-* +) *√jyā* からの派生を示しているようである：「パーラージカな [比丘尼] とは。向こう岸 (*pāra-*) とは、つまり教えを理解することであると言われている。それ (教えを理解すること) から [比丘尼が] 撃退され (← 強奪され)、掃討され、駆除され、排除された。それゆえ、『パーラージカな [比丘尼] (向こう岸から撃退された [比丘尼])』と言う (*pārājiketi pārāṃ nāmocycate dharma-jñānam | tato jīnā ojīnā samjīnā parihiṇā | tenāha pārājiketi*)」(Bhī-Vin (Mā-L) 85.1f. ≈ 『摩訶僧祇律』卷第三十六、Taishō 22, 514b26–c3, cf. 卷第二、237b23–c2, etc.).

なお、動詞前接辞 *parā* を伴った *√aj* の用例は、派生語も含めてパーリ語・サンスクリット語の辞書には見出されないため、使用例を確認することができない。

¹⁵ 斎藤 2011, p. i.

¹⁶ 斎藤 2011, p. ii.

いうことを方針として立てうる。

従って、*pārājika-* の場合、定義的用例の存在しない原義と考えられているものではなく、実際に用いられている定義的用例に基づいてこの語の現代語訳を試みることになるのではないかと予想される。ただし、その場合であっても現在有力とされている原義に関して注記を付すことは必要であろう。

4 取り扱うテキストの範囲

出家しているが比丘となる前段階の、主として二十歳未満の男性は、パーリ文献では *sāmaṇera-* と言われる。パーリ語のヴィナヤ聖典において、その語に対する定義的用例が以下のようにある。

sāmaṇero nāma dasasikkhāpadiko.

サーマナーラとは、十の学処を保持する者である。(Vin IV 122.4)

この定義的用例にある「十の学処」とは、(一) 殺生、(二) 偷盗、(三) 性的行為、(四) 嘘を言うこと、(五) 酒類、(六) 正午以降の食事、(七) 歌舞音楽を觀賞すること、(八) 花環や香などを身につけ、装飾品で飾ること、(九) 高い寝床や大きい寝床、(十) 金や銀を受け取ることをしないこと¹⁷であるので、この定義的用例は *sāmaṇera-* の実際のありように関して説明するものではあるが、用語そのものに関する言語的な説明ではない。

この語に対して言語的な説明を行なう定義的用例としては、以下の二つが挙げられる。

*samaṇa-bhāvo sāmaṇaṃ*¹⁸, *sāmaññan ti attho. tadatthaṃ iriyati pavattatī ti sāmaṇero.*

[*sāmaṇera* という語の内の] *sāmaṇa-* とは沙門たることであり、沙門生活という意味である。それを求めて行動する (*iriyati*)、活動するので、サーマナーラ (*sāmaṇera-*: *sāmaṇa-* + *ira* < *iriyati*) である。(Th-a II 183.22f.)

¹⁷ E.g. Vin I 83.32–84.2.

¹⁸ Th-a では *sāmaṇayaṃ* という読みが採用されているが、その箇所において異読として挙げられている *sāmaṇaṃ* を採用する。

¹⁹ 同様の説明は、すでに Kaccāyana と Kaccāyanavutti に見られる [Kacc & Kacc-v 124.2–6]。しかし、Saddanīti は *samaṇa-* という語を明記しているので、ここでは Saddanīti を引用する。

²⁰ AiG II,2, § 345b (p. 512): ‘Kl. *erā-* mit Vṛddhi dient zur Benennung meist niedrigstehender lebender Wesen nach andern lebenden Wesen’.

さらに、

vidhavā icc ādito saddagaṇato ɳerapaccayo hoti tassa apaccam icc etasmim atthe: vidhavāya matapatikāya apaccam vedhaverō, samaṇassa apaccam sāmaṇero icc ādi.

寡婦というものなどの語群の後で *era* という接 [尾] 辞が「それ (語群) の子孫」というこの意味で用いられる。夫が死んだ寡婦の子孫が寡婦に属する者である。沙門 (*samaṇa-*) の子孫が沙門に属する者 (*sāmaṇera-*) である、というものなど。(Sadd 784.23–25)¹⁹

sāmaṇera- という語に対して Theragāthā-aṭṭhakathā は通俗語源解釈を施し、Saddanīti は語形成に関して説明している。これら二つのうち、*samaṇa-* からの派生語として説明する Saddanīti の説明が受け入れられる²⁰。

このように *sāmaṇera-* の定義的用例には、実態に関する説明と言語的説明との二つが見られる。しかし、言語的説明をする Theragāthā-aṭṭhakathā も Saddanīti もヴィナヤ文献ではない。Theragāthā-aṭṭhakathā は経典である Theragāthā に対する注釈書であり、Saddanīti はパーリ語に関する文法書である。

ヴィナヤ文献に現われる用語に関して、収集する定義的用例をヴィナヤ文献だけに限定するのかパーリ語文献を広く渉猟するのかという問題が生じる。このことも、また本格的な調査をまって決定されるべきであろう。

以上の簡略な予備的調査から言えることは、プロジェクトとして期間が設定・限定されているという条件のもとでヴィナヤ文献における用語の定義的用例集を作成するにあたって、見出し語とする用語の選定、並びに取り扱う文献の範囲の明確化・線引きが肝要であるということである。一つの可能性としては、パーリ文献のヴィナヤ聖典における用語から重要なものを選び出し、ヴィナヤ聖典、並びに二つの注釈

(Samantapāsādikā と Kaṅkhāvitarāṇī) における定義的用例を検討するという方法が考えられる。しかし、どのような方法を取るにせよ、本格的な調査を開始すれば、種々の問題が生じるであろうことは容易に想像されうる²¹。それらは、実際の状況に応じて対処されるべきであろう。

略号、および参考文献

- 斎藤 2011 斎藤明 (代表) 『『俱舍論』を中心とした五位七十五法の定義的用例集』山喜房佛書林, 2011
- AiG II,1 J. WACKERNAGEL –A. DEBRUNNER, *Altindische Grammatik*, II,1, Göttingen 1957
- AiG II,2 J. WACKERNAGEL –A. DEBRUNNER, *Altindische Grammatik*, II,2, Göttingen 1954
- Bhī-Vin (Mā-L) G. ROTH, *Bhikṣuṇī-Vinaya: Manual of Discipline for Buddhist Nuns (Second Edition)*, Patna ²2005 (Tibetan Sanskrit Works Series, 12)
- VON HINÜBER 1985 O. VON HINÜBER, “Die Bestimmung der Schulzugehörigkeit buddhistischer Texte nach sprachlichen Kriterien,” in H. BECHERT (ed.), *Zur Schulzugehörigkeit von Werken der Hīnayāna-Literatur*, vol. I, Göttingen 1985, pp. 57–75
- 1988 O. VON HINÜBER, *Die Sprachgeschichte des Pāli im Spiegel der südostasiatischen Handschriftenüberlieferung: Untersuchungen zur Sprachgeschichte und Handschriftenkunde des Pāli I*, Mainz 1988 (Abhandlungen der geistes- und sozial-wissenschaftlichen Klasse, Jg. 1988, Nr. 8)
- 1995 O. VON HINÜBER, “Buddhist Law According to the Theravāda-Vinaya: A Survey of Theory and Practice,” *Journal of the International Association of Buddhist Studies* 18.1 (1995), pp. 7–45
- 1996 O. VON HINÜBER, *A Handbook of Pāli Literature*, Berlin/New York 1996
- Kacc & Kacc-v O. H. PIND, *Kaccāyana and Kaccāyanavuttī*, Bristol 2013
- Kkh (re-ed.) K. R. NORMAN & W. PRUITT (eds.), *Kaṅkhāvitarāṇī, by Bhadantācariya Buddhagosa*, Oxford 2003
- NOLOT 1987 É. NOLOT, “saṃghāvaśeṣa-, saṃghātiśeṣa-, saṃghādisesa-,” *Bulletin d’Études Indiennes* 5 (1987), pp. 251–272
- 1996 É. NOLOT, “Studies in Vinaya Technical Terms I–III,” *Journal of the Pali Text Society* 22 (1996), pp. 73–150
- 1999 É. NOLOT, “Studies in Vinaya Technical Terms IV–X,” *Journal of the Pali Text Society* 25 (1999), pp. 1–111
- Sadd H. SMITH (ed.), *Saddanīti: La grammaire palie d’Aggavaṃsa*, Oxford 2001
- SCHLINGLOFF 1964 D. SCHLINGLOFF, “Zur Interpretation des Prātimokṣasūtra,” *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 113 (1964), pp. 536–551
- Sp J. TAKAKUSU & M. NAGAI (eds.), *Samantapāsādikā: Buddhagosa’s Commentary on the Vinaya Piṭaka*, 7 volumes, London 1924–1947

²¹ ヴィナヤ聖典の内の「スッタヴィヴァンガ」が「ブラーティモークシャ」を誤解している場合が存在するということが、指摘されている [SCHLINGLOFF 1964]。このことから、時代的に隔たっているヴィナヤ聖典と注釈文献においても理解に齟齬が見られるということは、十分に考えられうる。

-
- Taishō 高楠順次郎・渡邊海旭(編)『大正新脩大藏經』100巻、東京1924-1932
- Th-a E. L. WOODWARD (ed.), *Paramattha-dīpanī Theragāthā-aṭṭhakathā: The Commentary of Dhammapālācariya*, 3 volumes, London 1940-1959
- UPASAK 1975 C. S. UPASAK, *Dictionary of Early Buddhist Monastic Terms*, Varanasi 1975
- Vin H. OLDENBERG (ed.), *The Vinaya Piṭakaṃ: One of the Principal Buddhist Holy Scriptures in the Pāli Language*, 5 volumes, London 1879-1883
- WHITNEY 1889 W. D. WHITNEY, *A Sanskrit Grammar, Including Both the Classical Language, and the Older Dialects, of Veda and Brahmana*, Leipzig²1889

経典解釈に基づく仏教用語の訳語検討

— 『瑜伽師地論』 「撰異門分」 に説かれる無常を例に —

中山 慧輝

(京都大学大学院)

はじめに

バウツダコーシャ・プロジェクトにおいて、室寺研究班は2017年に研究成果『『瑜伽師地論』における五位百法対応語ならびに十二支縁起項目語』(室寺ほか[2017])を公刊した。その中では瑜伽行派(Yogācāra)の根本典籍『瑜伽師地論』(Yogācārabhūmi)を扱い、五位百法に対応する用語並びに十二支縁起の項目語の定義的用例を回収して、現代基準訳語を提示している。成果の発表後に、筆者も研究協力者として加わり、経典に現れる同義異語や関連語を解説する「撰異門分」(Paryāyasamgrahaṇī)に注目し、初期瑜伽行派の仏教用語理解の解明を目指して調査中である。本報告では、その一例として、仏教の根本的な教理概念である無常(anitya / anityatā)を取り上げ、「撰異門分」における経典解釈を通して現代基準訳語をどのように考えることができるのかについて考察したい。

1 五位百法における無常の定義とその特徴

まず「撰異門分」の考察に入る前に、瑜伽行派の五位百法の枠組みにおける無常の定義を既刊のバウツダコーシャシリーズ(斎藤ほか[2014]、室寺ほか[2017])に基づいて確認しておこう。無常(anityatā)は、心不相応行に属し、生起(jāti)、変異(jarā)、存続(sthiti)に続いて、4番目の有為相(saṃskṛta-lakṣaṇa、形成さ

れたものの特徴)として列挙、解説される。『瑜伽師地論』の古層に位置する「本地分」(*Maulī bhūmi / *Maulyo bhūmayah)の「意地」(Manobhūmi)において次のように定義される。

すべての認識の流れには、共にはたらくすべての種子の流れが設定される。条件が存在するとき、条件によって、その最初に、流れとして以前は生じていなかったある存在要素が生じるが、その[存在要素]が、形成されたものの特徴である生起と言われる。…生起する瞬間の後に、一瞬間も状態を留めないことが無常である¹。

(室寺ほか[2017: 101]より抜粋)

ここでは、認識の中で、ある条件によって起こったばかりの存在要素が持続することなく、瞬く間に消滅することが無常の意味として理解されている。この解釈は新層に位置する「五識身相応地意地決択」(*Pañcavijñānakāyaśaṃprayuktamanobhūmi-viniścaya)にもほぼ同様に受け継がれている(室寺ほか[2017: 102]を参照)。しかし、『大乘阿毘達磨集論』(Abhidharmasamuccaya)や『大乘五蘊論』(Pañcaskandhaka)などの他の瑜伽行派文献においては、「集団の同類性において、形成されたものの連続が消滅、終息すること」と定義され²、瞬間に消滅することではなく、この世に生まれ存続し年老いた生き物存在(sattva)が消滅すること、つまり死を指す。「五識身相応地意地決択」において、無常の意味は「本地

¹ ManoBh (Skt.) 61.8–14, cf. 室寺ほか [2017: 101–102]:

sarvatra vijñāna-saṃtāne sarvo bīja-saṃtānaḥ saḥacaro vyavasthāpyate. sati pratyaye pratyaya-vaśāt tat-prathamataḥ saṃtatyānutpanna-pūrvō yo dharma utpadyate, sā jātiḥ saṃskṛta-lakṣaṇam ity ucyate. ... jāti-kṣaṇōrdhvaṃ kṣaṇānavasthānam anityatā.

² 『大乘阿毘達磨集論』は消滅(vināśa)、『大乘五蘊論』は終息(uparama)という。

AS (Skt.) 18.33–19.1, cf. 斎藤ほか [2014: 261]:

anityatā katamā. nikāya-sabhāge saṃskārāṇaṃ prabandha-vināśe 'nityatēti prajñaptiḥ.

³ 例えば、無常が3種に表現される時、消滅としての無常(vināśānityatā)、変化としての無常(vipariṇāmānityatā)、[手

分」の影響を受けて他にも別に設定されるが³、五位百法内で説かれる有為相としての無常の定義に限定すれば、『瑜伽師地論』では、「瞬間的な消滅」、『大乘阿毘達磨集論』などの他の瑜伽行派文献では、「生き物存在の連続の消滅」(死)と解釈される点で、五位百法に対応する同じ語の定義が同学派の中でも異なることには注意が必要である。

2 「撰異門分」の内容と構成

『瑜伽師地論』は大きく五部に分けられる。「撰異門分」はその一部をなし、「撰積分」(**Vyākhyā-saṃgrahaṇī*)と「撰事分」(*Vastusaṃgrahaṇī*)の2つと並んで、経典の解説に関係する。向井[1996: 577]に拠れば、その経典とは専ら阿含経典、特に『雑阿含経』(*Samyuktāgama*)であり、「撰異門分」は阿含経典に類出する同義異語や関連語、繰り返し用いられる定型句化した表現などを集めて、それぞれの語の意味を解説すると同時に、それらの間の意味の違いを明らかにする。構成としては「白品」(*śukla-pakṣa*, 功德の側面)と「黒品」(*kṛṣṇa-pakṣa*, 過失の側面)の二部から成り、それぞれ綱領偈(*uddāna*)に解説項目を列挙する。「白品」の綱領偈は8項目を並べるが、最後の *mārga* (*lam*, 道)に関する更なる綱領偈の中で、無常は、*anitya* (*mi rtag*, 無常)、*anityatā* (*mi rtag ñid*, 無常)として2度挙げられ、またそれとは別に *anitya-saṃjñā* (*mi rtag pa'i ḍu śes*, 無常想)としても触れられる(向井[1996: 571-569]を参照)。本報告では初めの *anitya* を考察対象とする。

3 「撰異門分」と「撰事分」

「撰異門分」は『雑阿含経』を中心とした経典を解説対象とするが、『雑阿含経』に基づいてより詳細な解説を行うのは「撰事分」である。「撰事分」の研究は主に印順[1983]、向井[1985]らによって進められており、「撰事分」の一々の解説が『雑阿含経』のどの経典に対応するのかが明らかにされ、本来の、あるいは瑜伽行派の伝える『雑阿含経』全体の構成も復元されている。

『雑阿含経』の解説を主題とする「撰事分」は、その解説中に「撰異門分」に言及することがある。向井[1996: 576]は、その理由として「撰異門分」が『雑阿含経』全般を通して典型的に現れる語句や文言を解説したものであることを指摘し、両者の相補的な関係を認める⁴。そして、実際に「撰事分」を検討してみると、「撰異門分」に言及しない場合であっても、「撰異門分」と共通点を有している事例がいくつか見つかかり、「撰異門分」が参照している経典を「撰事分」の解説から推測することができた。このことから、「撰事分」とは異なり『雑阿含経』の順に解説項目が列挙されず、典拠となる阿含経典の確定が難しい「撰異門分」の解説にあたって、「撰事分」の解説が有効な手掛かりとなるということが出来る⁵。

4 「撰異門分」における無常の訳語検討

次に、「撰異門分」の綱領偈に *anitya* として挙げられる箇所を、その解説と共通要素を持つ「撰事分」の該当箇所、並びにその典拠である『雑阿含経』第80経と比較して無常の訳語を検討してみたい(『雑阿含経』と「撰事分」の対応については印順[1983: 127-130]、向井[1985: 29]を参照)。

元から] 離れるという無常 (*viyogānityatā* / *visaṃyogānityatā*) が説かれる(室寺ほか[2017: 102-103]を参照)が、これは「声聞地」(*Śrāvakabhūmi*)の出世間道における無常観察(ŚrBh(Skt.) 474.6-485.5, 486.15-488.5, 488.11-19)の記述に由来する。

⁴ 「撰異門分」は4回、「撰事分」は15回にわたって相互に引用する。DELEANU[2006: 195]は、このような「分」や「地」をまたぐ相互の引用は『瑜伽師地論』の編纂過程の最後に付け加えられ、また「撰積分」を含むこれら三部は同時期に編纂されたとしている。一方、勝呂[1989: 264-279]は、「撰異門分」から「撰事分」の順を想定している。ただし、本稿で「撰異門分」の解説にあたって「撰事分」を手掛かりとするのは、あくまで便宜的な方法にすぎず、この通りの成立順序を想定したわけではない。これらの成立順序を再考するには、今後、諸研究成果を踏まえた上でのより多角的かつ詳細な調査を要するであろう。

⁵ このように、「撰異門分」は典拠となる阿含経典の確定が難しいため、「撰事分」と比べても研究の数は明らかに少ない。松田[1994]と向井[1996]の他に、例えば、『瑜伽師地論』に散在する『泡沫経』の解説をめぐる「撰異門分」に触れる袴谷[2008]や、ヴァスバンドウ(*Vasubandhu*)の『釈軌論』(*Vyākhyāyukti*)における経典解釈と比較して「撰異門分」の解説を引用する堀内[2016]などに限られる。

Paryāyasamgrahaṇī

(和訳) (チベット語訳より)

(1) 無常 (anitya)¹⁾ とは、壊れ、消滅する性質である。(2) 形成された (saṃskṛta) とは過去に依拠して考察されたことである。(3) 思惟された (cetita) とは未来に依拠して希求されたことである。(4) 縁起した (pratītyasamutpanna) とは現在時において原因と条件とによって起こっていることである。(5) 滅尽する性質 (kṣaya-dharma) とは一部が滅尽することであり、(6) なくなる性質 (vyaya-dharma) とはすべてが滅することである。また、(5) 滅尽する性質はすべてが滅することであり、(6) なくなる性質とは〔5つの部類 (五蘊) の〕流れが変異することである。(8-1) 貪りを離れる性質 (virāga-dharma) とは過失を伴っていること (*sādīnava) [から]、(8-2) 止滅する性質 (nirodha-dharma) とはすべての形成されたもの (*saṃskṛta-dharma) から離れていくこと (*niḥsaraṇa) である。

¹⁾ anitya をはじめとして解説される 8つの語句のサンスクリットは、ほとんど対応のある『相応部経典』(Saṃyuttanikāya) 中「蘊篇」(Khandha-saṃyutta) の「アーナンダ」(Ānanda, SN, vol. III, (Pāli) 24.16–25.7, 漢訳阿含対応なし) や部分的に対応する『人経』(Mānuṣyakasūtra, AKBh (Skt.) 70.5) などに基づくものである。ただし、列挙される文脈は、以下の『雑阿含経』や「撰事分」とは異なる。また、次の「撰事分」に合わせて番号を付したため、(7) を欠く。

(漢訳)

復次言無常者、謂性破壊、朽敗法故。言有爲者、謂依前際、所尋思故。言造作者、謂依後際、所希望故。言縁生者、謂依現世、衆因縁力所生起故。有盡法者、謂一分盡故。有沒法者、謂全分滅故。又有盡法者、謂全分滅故。有沒法者、謂相續變壞故。有離欲法者、謂過患相應故。有滅法者、謂一切有爲法皆有出離故。

(卷 83, T [30] 766a26–b04)

(チベット語訳)

mi rtag pa ni źig pa dañ 'jig pa'i chos can no // 'dus byas ni sñon gyi mtha' las brtsams te rnam par brtags pa gañ yin pa'o // bsams¹⁾ pa ni phyi ma'i mtha' las brtsams te don du gñer ba gañ yin pa'o // rten ciñ 'brel bar 'byuñ ba ni da ltar gyi dus su rgyu dañ rkyen gyi dbañ gis byuñ ba gañ yin pa'o // zad pa'i chos can ni phyogs gcig zad pa'o // 'jig pa'i chos can ni thams cad 'gag pa'o // yañ zad pa'i chos can ni thams cad 'gag pa'o // 'jig pa'i chos can ni rgyun rnam par 'gyur ba'o // 'dod chags dañ bral ba'i chos can ni ñes dmigs dañ ldan pa'o // 'gog pa'i chos can ni 'dus byas kyi chos thams cad las ñes par 'byuñ ba'o //

¹⁾ bsams P : bsam D

(D 35a4–6, P 41b5–b8)

Saṃyuktāgama

【参考】『仏説聖法印経』(T [02] (103)), 『仏説法印経』(T [02] (104)); 印順 [1983: 127–128], 長崎・加治 [2004: 175–177]; パーリ対応経なし

(八〇) 如是我聞一時佛住舍衛國祇樹給孤獨園。爾時世尊告諸比丘、「當說聖法印及見清淨。諦聽、善思。若有比丘作是說、「我於空三昧、未有所得、而起無相、無所有、離慢、知見」者、莫作是說。所以者何。若於空未得者、而言我得無相、無所有、離慢、知見者、無有是處。若有比丘作是說、「我得空。能起無相、無所有、離慢、知見」者、此則善說。所以者何。若得空已、能起無相、無所有、離慢、知見者、斯有是處。云何爲聖弟子及見清淨。」

比丘白佛、「佛爲法根、法眼、法依。唯願爲說。諸比丘聞說法已、如說奉行。」

佛告比丘、「若比丘於空閑處樹下坐、善觀色無常、磨滅、離欲之法、如是觀察受、想、行、識無常、磨滅、離欲之法、觀察彼陰無常、磨滅、不堅固、變易法、心樂清淨解脫、是名爲空。

如是觀者、亦不能離慢、知見清淨、復有正思惟三昧、觀色相斷、聲、香、味、觸、法相斷。是名無相。

如是觀者、猶未離慢、知見清淨、復有正思惟三昧、觀察貪相斷、瞋恚、癡相斷。是名無所有。

如是觀者、猶未離慢、知見清淨、復有正思惟三昧、觀察¹⁾我所¹⁾從何而生、復有正思惟三昧、觀察我、我所、從若見、若聞、若嗅、若嘗、若觸、若識而生、復作是觀察、「若因、若緣而生識者、彼識因緣、爲常、爲無常。」復作是思惟、「若因、若緣而生識者、彼因彼緣、皆悉無常。」復次「彼因彼緣、皆悉無常、彼所生識、云何有常。無常者、是有爲行、從緣起、是患法、滅法、離欲法、斷知法。」是名聖法印、知見清淨。是名比丘當說聖法印、知見清淨。」如是廣說。佛說此經已、諸比丘聞佛所說、歡喜奉行。

¹⁾ 印順 [1983: 128]、長崎・加治 [2004: 176] の訂正に従い、㊦の異読を採って「我我所」と読む。

(卷 3, T [02] 20a25-b27)

Vastusaṃgrahaṇī

【参考】印順 [1983: 128-130]

(和訳) (チベット語訳より)

…また、それ(私という慢心 (asmi-māna) が働く原因である、欲望対象 (kāma) あるいは存在している身体 (satkāya) への執着を伴う認識 (vijñāna)) は 8 種によって知り尽くすべきである (parijñeya)。それを知り尽くした直後に、その欠点を離れることになるので、[それが] 極めて清浄である、極度の慢心を欠いた、無我の見解 (*suviśuddha-nirabhimāna-nairātmya-darśana) であると知るべきである。その [8 つの] うち、壊れており、消滅することを性質とするから、(1) 無常 (anitya) である。行為と煩惱に基づいて成り立っているから、(2) 形成された (saṃskṛta) である。以前の誓願に基づいて成り立っているから、(3) 思惟された (cetita) である。自身の種子 (原因) と [自身より] 外の現在の条件に基づいて成り立っているから、(4) 縁起した (pratītyasamutpanna) である。未来時という点から、老いることを性質とするから、(5) 滅尽する性質 (kṣaya-dharma) であり、死ぬことを性質とするから、(6) なくなる性質 (vyaya-dharma) である。老いと死の前にも、病気などの種々なる害の受け皿となっているから、(7) 変異する性質 (*vipariṇāma-dharma) である。対治するもの (pratipakṣa) ¹⁾ に依拠することで貪りを離れることができるから、また止滅することができるから、この世において (8-1) 貪りを離れる性質 (virāga-dharma) であり、(8-2) 止滅する性質 (nirodha-dharma) である。

また、それらをまとめるならば、〔過去、現在、未来の〕三時に属する過失 (*ādīnava) を考察するのであり、〔それは〕(8-1) 貪りを離れる〔性質〕と、(8-2) 止滅する性質を除くそれ以外の〔7つの〕種類によって知るべきであって、その2つによって出離 (*nihsaraṇa) を考察すると知るべきである。したがって、過失と出離の2つによってその〔欲望対象や存在している身体への執着を伴う〕認識を知り尽くすことが、極めて知り尽くすことである。…

¹⁾ pratipakṣa はチベット語訳 (gñen po) による。漢訳 (現量) は直接知覚 (pratyakṣa) と読む。

(漢訳)

…又由八相、能遍了知。遍了知故、除諸過患。當知是名極善清淨離増上慢無我真智。又於此中、已滅壞故、滅壞法故、說名無常。諸業、煩惱所集成故、說名有爲。由昔願力所集成故、名思所造。從自種子、現在外緣所集成故、說名緣生。於未來世、衰老法故、說名盡法、死歿法故、說名歿法。未老死來、爲疾病等種種災橫所逼惱故、名破壞法。由依現量、能離欲故、能斷滅故、名於現法、得離欲法及以滅法。

當知此中、除離欲法及以滅法、由所餘相、略觀三世所有過患、由所除相、觀彼出離。若由如是過患、出離、遍知彼識名善遍知。… (卷 87, T [30] 792a18–b2)

(チベット語訳)

... de yañ des rnam pa brgyad kyis yoñs su śes par bya ba yin te / de yoñs su śes pa'i mod la de'i ñes pa dañ bral bar gyur pas bdag med pa mthoñ ba śin tu rnam par dag ciñ mñon pa'i ña rgyal med par rig par bya'o // de la zig par gyur pa dañ ¹⁾ 'jig pa'i chos can yin pas na **mi rtag pa'o** // las dañ ñon moñs pa las yañ dag par grub pas na 'dus byas so // sñon gyi smon lam las yañ dag par 'grub pas na bsams pa'o // rañ gi sa bon dañ da ltar gyi phyi rol gyi rkyen las yañ dag par grub pas na rten ciñ 'brel par 'byuñ ba'o // ma 'oñs pa'i dus kyi sgo nas rga ba'i chos can yin pas na zad pa'i chos can no // 'chi ba'i chos can yin pas na med par 'gyur ba'i chos can no // rga ba dañ 'chi ba'i sña rol na yañ nad la sogs pa'i gnod pa rnam pa sna tshogs kyi snod du gyur pas ²⁾ na 'gyur ba'i chos can no // gñen po la brten pas 'dod chags dañ bral bar byar ruñ ba dañ / 'gog par byar ruñ bas na tshe 'di la 'dod chags dañ bral ba'i chos can dañ / 'gog pa'i chos can yin ³⁾ no //

de dag kyañ mdor bsdu na / dus gsum du gtogs pa'i ñes dmigs brtag pa ste / 'dod chags dañ bral ba dañ ⁴⁾ 'gog pa'i chos las ma ⁵⁾ gtogs pa de las g'zan pa'i rnam pa dag gis rig par bya'o // de gñis kyis ni ñes par 'byuñ ba brtag par rig par bya'o // des ñes dmigs dañ ñes par ⁶⁾ 'byuñ ba ⁷⁾ gñis kyis rnam par śes pa de yoñs su śes pa ni śin tu yoñs su śes pa yin no // ...

¹⁾ / D : om. P ²⁾ pas D : pa P ³⁾ yin D : om. P ⁴⁾ / D : om. P ⁵⁾ las ma D : la P ⁶⁾ par D : om. P

⁷⁾ ba D : om. P

(D 171a5–b3, P 195a1–8)

上記の3つを比較する前に、前提として確認しなければならないことがある。それは、無常をはじめとする8つの語が完全には合致しないことである。『雜阿

含經』第80経は「無常者、是有爲行、從緣起、是患法、滅法、離欲法、斷知法。」(下線部)とし、思惟された(cetita)などを欠く一方、患法、斷知法が合わないな

ど、列挙される語が多少異なる。つまり、瑜伽行派が伝える『雑阿含経』は現存の『雑阿含経』と完全に一致しない。しかし、後に確認するように、上記の「撰事分」の解説は『雑阿含経』第80経を対象としているため、彼らは現存の『雑阿含経』第80経とは異なる読みを含む経典を伝承しており、そこでは「撰事分」と同じ8つの語が並んでいたと想定される。また、「撰異門分」は、「撰事分」と比べると、(7)変異する性質を欠き、定義自体異なるものもある。これは『雑阿含経』第80経を直に解説する「撰事分」と、経典全般に現れる関連語や定型表現を解説する「撰異門分」という異なった立場で経典を扱っていることに起因すると思われる。これらに似た語の列挙は、幸い、他の『雑阿含経』などに見出せるため⁶、「撰異門分」はそれらも踏まえた解説を行っていると考えられる。項目や解説が異なる理由は以上のように説明できるため、『雑阿含経』第80経や「撰事分」の解説は依然「撰異門分」の解説に有効であるといえる。

では、『雑阿含経』第80経及びそれに対応する「撰事分」の概略を以下に示そう。『雑阿含経』第80経では、空(**sūnya*)を修めることで、5つの部類(*pañca-skandha*)が無常であると観察し、特徴のないこと(**ānimitta*)を修めることで、いろかたちや音声などの外の認識領域(六外処)の特徴を捨て、さらに何もないこと(**ākimcanya*)を修めることで、貪り、憎しみ、愚かさの三毒の特徴を捨てるという3種の精神集中(*samādhi*)を説き、最後に私あるいは私のもの(*ātmātmiya*)という思いを起こす認識(*viñāna*)が無常である云々と観察することで、聖者の法印(**ārya-dharma-mudrā*)を獲得することが説かれる。それに対して「撰事分」は、この経典の主題を「極度の慢心を欠いた、無我の見解」(**nirabhimāna-nairātmya-darśana*)と理解して、3種の精神集中による見解を、極めて清浄とはいえないもの(**asuviśuddha*)とし、最後の無常云々による見解を、極めて清浄であるもの(**suviśuddha*)とし、区別する。前者の見解が極めて清浄とはいえない理由は以下の2つによる。(1)その見解が順決択分の四善根という聖者の前段階に属するものであり、その状態にお

いて「私が空性を修めている、私には空性がある」などと私、私のものという観念、すなわち、私という慢心(*asmi-māna*)が障害となって働き、無我の観察を妨げること、(2)その私という慢心を引き起こす認識を知り尽くしていないために、涅槃できないことである。それゆえ、無常をはじめとする8つの観点から認識を知り尽くすることによって、無我の見解が極めて清浄なものとなり、聖者の法印、つまり一切の存在要素が無我であること(一切法無我)が獲得されると解説する。

以上のような『雑阿含経』や「撰事分」の文脈を踏まえると、「撰異門分」に現れる無常などの8つの語は、やはり経典に現れる定型句化された表現であって、無常の同義異語、あるいは単なる類似した語の列挙ではないことが分かる。さらに『雑阿含経』第80経は、空の観察において無常を見ることに始まり、最後に、無常である諸因縁から生じた認識も無常に違いないと観察して、無常をはじめとする8つの観点からその認識を知り尽くし、無我の獲得に至ると説いており、無我の獲得に対する無常の重要性を強調しているが、このことこそ、「撰異門分」が無常を綱領偈の項目に挙げ、その項目のもとで、これらの無常に始まる経句の意味を解説する理由であると考えられるのである。また、それは、無常を含む綱領偈が「白品」の*mārga*(道)に関するものであること、つまり、この無常に始まる観察が涅槃に向かうひとつの道を示していることとも符合し、「撰事分」の解説ともうまく合致する。

ここまで、「撰異門分」が解説する無常に始まる定型表現が、実際にどのような経典に用いられるのかを見てきたが、この「撰異門分」において、無常を定義する用例は、限定すれば「壊れ、消滅する性質」のみとなる。この記述から現代基準訳語を考えるならば、日本語としてもなじみ深い「無常」が適当に思われるが、「消滅すること」も可能である。ただし考慮すべきなのは、「撰異門分」が無常を、それに次いで列挙される、形成された、縁起したなどの語と連動し、最終的に無我や涅槃へと結びつく、瑜伽行派の修行道において重要な概念であると見なしていることであろう。

⁶ 先ほど「撰異門分」の和訳に対する注に挙げた文献の他に、『雑阿含経』第357経(巻14, T [02] 99c27-100a11, パーリ対応経:『相應部経典』中「因縁篇」(*Nidāna-samyutta*)の「智の抛り所」(*Ñāṇassa vatthūni*, SN, vol. II, (Pāli) 59.33-60.26)がある。

5 おわりに

「撰異門分」が取り上げる無常 (*anitya*) について、『雑阿含経』並びに「撰事分」と比較して検討し、現代基準訳語として、「無常」あるいは「消滅すること」を提示した。これは冒頭で確認したように、既刊のパウツダコーシャシリーズが無常 (*anityatā*) に与える訳語と基本的に同じである。しかし、『瑜伽師地論』の「意地」が定義する「存在要素の瞬間的な消滅」や、『大乘阿毘達磨集論』が定義する「生き物存在の消滅」(死)が、形成されたもの(有為)の特徴を示しているのとは異なり、「撰異門分」では具体的に無常の意味が明示されない。それについては、『雑阿含経』や「撰事分」を手掛かりに、「撰異門分」で取り上げられた無常の語

が、涅槃を妨げる私という慢心を引き起こす認識が無我であることを観察するために用いられるものであることを確認した。このように、ある用語に同じ訳語を与えたとしても、それが説かれる文脈や意味内容に留意する必要があるであろう。

今回検討したように、「撰異門分」は表現が端的であるだけに、説かれる文脈の決定が難しく、阿含經典や「撰事分」との比較といった地道な考察が必要となる。しかし、「撰異門分」が解説する經典用語がどの文脈において、他の語とどのように関連して理解されているのかについて細かく吟味することは、初期瑜伽行派の仏教用語理解の解明に有用であると考えられよう。室寺研究班では今後も「撰異門分」を中心とした研究に努めていく予定である。

略号表

AKBh	<i>Abhidharmakośabhāṣya</i> , (Skt. ed.) LEE [2005].
AS	<i>Abhidharmasamuccaya</i> , (Skt. ed.) GOKHALE [1947].
Ch.	Chinese translation
D	sDe dge edition of the Tibetan Tripiṭaka
ManoBh	<i>Manobhūmi</i> , (Skt. ed.) BHATTACHARYA [1957: 11–72].
om.	omitted in
P	Peking edition of the Tibetan Tripiṭaka
ŚrBh	<i>Śrāvakaḥūmi</i> , (Skt. ed.) SHUKLA [1973].
Skt.	Sanskrit
SN	<i>Samyuttanikāya</i> , (Pāli ed.) FEER [1975] [1989].
T	Taishō Shinshū Daizōkyō 大正新脩大蔵経
Tib.	Tibetan translation

一次文献

- Abhidharmakośabhāṣya* of Vasubandhu
(Skt. ed.) LEE [2005]
- Abhidharmasamuccaya* of Asaṅga
(Skt. ed.) GOKHALE [1947]
- Samyuktāgama*
(Ch.) 『雑阿含経』: T [02] (99) 1a03–373b18, 50 卷 (求那跋陀羅訳)
- Samyuttanikāya*
(Pāli ed.) II: FEER [1989], III: FEER [1975]
- Yogācārahūmi*
Maulī bhūmi / Maulyo bhūmayah

Manobhūmi

(Skt. ed.) BHATTACHARYA [1957: 11–72]

Śrāvakabhūmi

(Skt. ed.) SHUKLA [1973]

Paryāyasamgrahaṇī

(Tib.) D (4041) 'i 22b1–47b7, P (5542) yi 27a3–56b1

(Ch.) T [30] (1579) 760a07–772b09 (玄奘訳)

Vastusamgrahaṇī

(Tib.) D (4039) zi 127a4–335a7, P (5540) 'i 143a1–382a5

(Ch.) T [30] (1579) 772b13–881c03 (玄奘訳)

二次文献

齋藤明ほか (齋藤明、高橋晃一、加藤弘二郎、堀内俊郎、石田尚敬、松田訓典)

- [2014] 『瑜伽行派の五位百法—仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集—』(パウツダコーシャII), インド学仏教学叢書 16, 東京: 山喜坊佛書林.

勝呂信静

- [1989] 『初期唯識思想の研究』, 東京: 春秋社.

長崎法潤・加治洋一

- [2004] 『新国訳大蔵経 雑阿含経 I』, 東京: 大蔵出版社.

袴谷憲昭

- [2008] 「実修行派の経典背景の一実例」, 『唯識文献研究』, 東京: 春秋社, pp. 576–604. (初出: 『駒澤大学佛教学部論集』 37, 2006, pp. 630–609)

堀内俊郎

- [2016] 『世親の阿含経解釈—『釈軌論』第2章訳註—』, 東京: 山喜坊佛書林.

松田和信

- [1994] 「『瑜伽論』「撰異門分」の梵文断簡」, 『印度哲学仏教学』 9, pp. 90–108.

向井亮

- [1985] 「『瑜伽師地論』の撰事分と『雑阿含経』—『論』所説の〈相応アーガマ〉の大綱から『雑阿含経』の組織復原案まで—附『論』撰事分—『経』対応関係一覧表」, 『北海道大学文学部紀要』 33-2, pp. 1–41.

- [1986] 「『瑜伽師地論』「撰積分」「撰異門分」の結構—Uddāna 頌による科判—」, 『今西順吉教授還暦記念論集 インド思想と仏教文化』, 東京: 春秋社, pp. 580–569.

室寺義仁ほか (室寺義仁、高務祐輝、岡田英作)

- [2017] 『『瑜伽師地論』における五位百法対応語ならびに十二支縁起項目語—仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集—』(パウツダコーシャV), インド学仏教学叢書 21, 東京: 山喜坊佛書林.

印順

- [1983] 『雑阿含経論會編 上』, 台北: 正聞出版社.

BHATTACHARYA, Vidhushekhara

- [1957] *The Yogācārabhūmi of Ācārya Asaṅga: The Sanskrit Text Compared with the Tibetan Version, part 1*, Calcutta: The University of Calcutta.

DELEANU, Florin

- [2006] *The Chapter on the Mundane Path (Laukikamārga) in the Śrāvakahūmi: A Trilingual Edition (Sanskrit, Tibetan, Chinese), Annotated Translation, and Introductory Study*, 2 vols., Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies.

FEER, M. Léon

- [1975] *Samyutta-nikāya, Part III, Khandha-vagga*, Oxford: Pāli Text Society. (First published in 1890)
- [1989] *Samyutta-nikāya, Part II, Nidāna-vagga*, Oxford: Pāli Text Society. (First published in 1888)

GOKHALE, V. V.

- [1947] “Fragments from the Abhidharmasamuccaya of Asaṅga,” *Journal of the Bombay Branch of the Royal Asiatic Society New Series* Vol. 23, pp. 13–38.

LEE, Jong Cheol

- [2005] *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu, Chapter IX: Ātmavādapraṭiṣedha*, Bibliotheca Indologica et Buddhologica 11, Tokyo: The Sankibo Press.

SHUKLA, Karunesh

- [1973] *Śrāvakahūmi of Ācārya Asaṅga*, Tibetan Sanskrit Works Series vol.14, Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute.

仏教用語再訪

—aprasaṅga, calita, 所依—

堀内 俊郎

(浙江大学ポストドクター)

はじめに

本稿では、既存のテキストに見られる副題に挙げた3つの語について、仏教語彙の研究への貢献の観点から、再検討してみたい。3語はいずれも当該文脈内において問題があり、修正されるべき語である。

1 aprasaṅga

安慧 (Sthiramati) の『唯識三十論 (Triṃśikāvijñāpti-bhāṣya, TrBh)』 ad. 『三十頌』 1c での議論。対論者から以下のような論難がなされる。

katham etad gamyate vinā bāhyenārthena vijñānam evārthākāram utpadyata iti (40.19–20) (“外界の対象物なしに、識のみが対象物の形象をもって生ずる”ということとは、どのようにして理解されるのか。)

それに対する回答は以下の通りで、下線部が問題となる箇所である。

TrBh, 42.20–22: bāhyo hy arthaḥ svābhāsavijñāna-janakatvena vijñānasyālambanapratyaya iṣyate na kāraṇatvamātreṇa samanantarādipratyayād viśeṣāprasaṅgāt |

TrBh(t), 43.26–27: ... de ma thag pa'i rkyen la sogs pa dang bye brag med par 'gyur ba'i phyir ro//

[和訳 (下線部まで。以下で提示する理解による)] なぜならば、外界の対象物は、自己の顕現を持つ識を生じさせるものであることによって、識にとっての所縁縁として認められるのであって、原因であることのみによって [所縁縁と認められるの] ではないからである。

さて、下線部について、「[もし、外界の対象物が原因であることのみによって所縁縁と認められるならば、所縁縁は] 等無間縁などと区別がないという誤った帰結となるからである」という理解で諸訳 (たとえば、荻

原雲来、宇井伯寿、山口益、荒牧典俊) は一致しており、その点に問題はない。問題はテキストである。

まず、Buescher 氏が確認しているように (Introduction, p. 11)、本論に関しては複数の写本が存在するが、後代の写本は C/D 写本 (周知のように D 写本は C 写本の中間部分に相当するのであって D という違った名称が与えられているが実質は C と同一写本である) の複写に過ぎないので、それに依拠すべきである。そして、氏の注 (TrBh, 42. fn. 12) が報告するように、その C 写本は

samanantarādipratyayādiviśeṣāprasaṅgāt

と読んでおり、Lévi 氏はそれに従っている。他方、宇井訂正案 (同書の略号では UIse) は 2 番目の ādi を削除し、

samanantarādipratyayaviśeṣāprasaṅgāt

とする。それに対し、Buescher 氏は上記の通り、

samanantarādipratyayād viśeṣāprasaṅgāt

とする。この語に対する同注をさらに最後まで引くと、以下の通り。

H (3,11) copies C, yet suggests above the line: *samanantarapratyayādiviśeṣāprasaṅgāt* ; TrBht : *de ma thag pa'i rkyen la sogs pa dang bye brag med par 'gyur ba'i phyir ro* suggests **samanantarapratyayādiviśeṣāprasaṅgāt* (“because of the [absurd] consequence that conditions like the condition of immediate and similar antecedency would not [account for] differences”). Katsura (privately): *samanantarādipratyayādiviśeṣāprasaṅgāt*. The restitution *samanantarādipratyayād viśeṣāprasaṅgāt* (“since a condition, such as the condition of immediate and similar antecedency, would be without consequence

[of accounting] for the differences”) has the advantage of emending the received Sanskrit text with as little change (deleting only the letter i of the second -ādi-) as possible.

TrBh のチベット語訳から推定される梵本については後に論ずる。Katsura 氏の想定 (**samanantarādi-pratyayāviśeṣaprasaṅgāt*) は優れたものである。すなわち、X-prasaṅga (X という好ましくない帰結がある) という形は頻出し、この文脈でもその意味が期待されるが、X-aprasaṅga という形はあまり例がなく (『俱舍論』などに用例があるが) この文脈には合わないということに基づくのであろう。他方、Buescher 氏の訂正は氏が自負するように第 2 の ādi の i を削除するだけということによって写本の形を尊重したように思われる (実際はそうではないのだが) が、aprasaṅga という形 (氏によれば「帰結しない (without consequence)」を意味する) が残るままとなる。

さて、筆者の代案は上記に触発されてのものであろうが、それらのいずれとも異なる。その際、写本の読みを基準にすべきことは言うまでもない。その読みを再度確認しておく、

C: *samanantarādi-pratyayāviśeṣaprasaṅgāt*

であり、筆者も現認済みである。ここから、最小限の訂正によって、かつ、*aprasaṅga* という、この文脈に合わない形を避けて修正するとすれば、[1] 筆者の案として、

**samanantarādi-pratyayād a viśeṣaprasaṅgāt*

が得られる。すなわち、この修正は、イタリクスで強調した通り、(1) *yādi* の後の i を削除し (それによってできる形は Buescher 氏の想定するような -d v-ではなく、-d avi-なのである)、(2) *ā* を *a* とした、というもので、写本ごく簡単な修正である。筆者の修正は 1 か所だけではなく 2 か所にわたるが、(2) は写本に頻出する短音 *a* と長音 *ā* の誤写で説明がつく。

(1) については、Buescher 氏の訂正は現行写本の -*yādivi*- から i を削除して -*yād vi*- としたのみだという (-*yādivi*- > *-*yād vi*- (y は不要であるが下記のデーヴァナーガリー文字の表示の都合である)) ののだが、先に少し触れたように、話はそこまで単純ではない。あくまで便宜的にはあるがデーヴァナーガリーで考えてみよう。すなわち、氏の想定は、逆から言えば、現行写本の手本 (Muster) には *-*yād vi*- とあったものを現行写本は -*yādivi*- としたのだということとなる (*-*yād vi*- > -*yādivi*-, *-*याद्वि*-/*-*याद् वि*- > -*याद्वि*-)。しかし、前者の形は、写本で考えれば、(i) d と vi をつなげて結合体とするか、(ii) d の下に *virāma* が打たれているということが想定される。しかし、それらの形から間に i が挿入されて -*yādivi*- となることは想定しづらいのである。たとえば (i) の場合だと、結合体の (dvi) を分解して i を挿入することが起こったのだと想定することになるが、それは確率的に非常に低いものであろう。というのは、写本というものはその原本 (Muster) からの筆写によって書き継がれてきた経緯を考えると、その際起こりうる誤写の可能性としては、形か音による間違いが大半 (梵本においては前者の例が多いであろう) であろうが、結合体の -*yādvi*- から -*yādivi*- はそのいずれによっても説明できないからである。(ii) の場合はその不都合は起きないが、(ii) はそもそもが確率的に低い (*virāma* を打つ理由がない) ¹。

他方、筆者の訂正案は *-*yād avi*- > -*yādivi*-, -*याद्वि*- > -*याद्वि*- ということであるが、Muster に i の文字が挿入されてしまった (形の類似による誤写) という単純ミスで説明がつく。そしてそれは、前にある *ādi* に引きずられて、i を挿入し、こちらも *ādi* という形にしてしまったという経緯も推測しうる (破線部を参照)。誤伝の経緯としては、「形の類似による、前の語句からの影響による改変」とでもできよう。まとめると、以下のような誤伝が起こったと思われる。

¹ -*ādvi*- の形は、ad.6 偈 cd, TrBh, 64.13 にみられる。その箇所については諸写本は欠損しているものが多いが、D 写本にはその箇所は存在し、-*ādvi*-, 32.D (8b5) と、結合体となっている。さらに、dvi (二つ) という形を除いて、d と vi が連続している例をいくつか見てみると、-*na<va>d vijñeyam* (C1b6), -*vad vi*- (C2a1), -*vad vi*- (C2b2), -*vad vi*- (E3.2), -*vad vi*- (E4.5) の例があり、いずれも dvi は結合体であって、*virāma* が打たれているのではない。写本は Katsumi Mimaki, Musashi Tachikawa, and Akira Yuyama ed., *Three Works of Vasubandhu in Sanskrit Manuscript*, 1989, The Centre for East Asian Cultural Studies, Tokyo: Japan, 1989 所取のものを参照した。C や D 等といった写本の略号もそれに依拠する。

*samanantarāḍipratyayād aviśeṣaprasaṅgāt
> samanantarāḍipratyayāḍi viśeṣāprasaṅgāt

その線で考えれば、[2] Katsura 氏の想定した

*samanantarāḍipratyayāviśeṣaprasaṅgāt
> samanantarāḍipratyayāḍi viśeṣāprasaṅgāt

も同様の誤伝の経緯で説明しうるものであり、説得力のあるものである。

さて、筆者の訂正へのさらなる根拠を示せば、viśeṣa は Ab を支配することも挙げられる（たとえば、viśeṣaṇa の例であるが、手近なところでは ASBh (Tatia ed.), 26: asaṃskṛtād viśeṣaṇārtham, (~ las bye brag tu dbye ba'i phyir)）。

ところで、たしかにチベット訳は筆者の想定に好意的ではないように見えるかもしれない。そこには先に提示したように

de ma thag pa'i rkyen la sogs pa dang bye brag med par
'gyur ba'i phyir ro

とある。しかし、筆者の想定梵本に対する想定チベット語訳は

*de ma thag pa la sogs pa'i rkyen dang/las bye brag med
par 'gyur ba'i phyir ro

となってしまう。これに関しては、(a) ādi の位置は翻訳の際に変えたという可能性²、(b) チベット語訳者の見ていた原文が筆者の想定と異なっていた、という二つの可能性を指摘しておきたい。また、チベット語では、「～との区別 (viśeṣa)」という場合、「～との」には las を取ることが多いであろうが dang も可である。

[3] 他方、本稿の草稿をご覧いただいた際、この箇所に関し、斎藤明教授から、*samanantarapratyayāder aviśeṣaprasaṅgāt と修正する可能性の示唆を受けた。記して謝意を表す。この想定は ādi の位置がチベット語訳と一致するという大きな利点がある。また、デーヴァナーガリーで考えると、यादेरविとなり、現行写本の C: यादिविに対して少し修正した後に ra の一文字が加えられる形になってしまうものの、誤伝の可能性としてはそのような形も可能であり、これも有力な修正候補である。

*samanantarapratyayāder aviśeṣaprasaṅgāt
> samanantarāḍipratyayāḍi viśeṣāprasaṅgāt

いずれにせよ、写本の読みを重視することは重要であるが、aprasaṅga という形を採用する必要はないということである。

なお、aviśeṣaprasaṅga という用例は複数の文献にみられる。一例のみ挙げると、

Nyāyasūtra, 5.1.23: ekadharmopapatter aviśeṣe
sarvāviśeṣaprasaṅgāt sadbhāvopapatter aviśeṣasamaḥ/

2 calita

Abhidharmasamuccaya (AS, 『阿毘達磨集論』) における、滅尽定 (抑止の心統一) の説明の箇所である。テキストは Gokhale, V.V., “Fragments from the Abhidharma-samuccaya of Asaṅga”, *Journal of Royal Asiatic Society, New Series* 23, Bombay Branch, 1947, 13–38 から、和訳は『五位百法』から引いておこう。

nirodhasamāpattiḥ katamā/ ākiñcanyāyatanavītarāgasya
bhavāgrāt* calitasya (AS, 18.25)

[和訳] 抑止の心統一とは何か。無所有処 (無色界第三処) についての貪りを離れ、有頂 (無色界最高処) を離れた者が (『五位百法』 p. 233)

和訳に問題はない。問題となるのは下線部である。Gokhale 氏のテキストには t のあとに virāma がある (筆者の記号は「*」) のである。他方、関連文献である『五蘊論』 (Pañcaskandhaka, PS)、『五蘊論釈』 (PSVi) には、bhavāgrād uccalitasya とある (PS, 14.11 (『五位百法』 p. 235), PSVi, 77.14–78.1)。意味上も、Apte の梵英辞書によれば calita は 1. shaken; 2. gone; 3. attained; 4. known; 5. removed であるので、あえて言えば 2 が対応しようが、他方 uccalita では 1. on the point of going; 2. gone up or out で、こちらの 2 の方が、文脈上、より適合する。また、uccalita の用例は諸文献に頻出し、Abhidharmasamuccyabhāṣya (Tatia ed.), PSVi には否定形 anuccalita の例もある。チベッ

² ただ、TrBh のチベット語訳を少し見る限り、ādi の位置は梵本と正確に対応しているようである。たとえば cakṣurādivijñānaṃ, mig la sogs pa'i rnam par shes pa。ただ、この例は、逆にいえば、「A などの B」という表現は「A-ādi-B」となるということであり、samanantarāḍipratyaya- という想定に好意的な例となる。そして、その場合、筆者の想定を擁護するには (b) の可能性を指摘することとなる。

ト語訳は、上記の3文献(AS, PS, PSVi)では揃って *gyen du bskyod pa* とある。

そこで、Gokhale 氏校訂の AS にある *calita* という形に疑問を抱いて AS の写本を確認すると、実際は、*-t* cali-*ではなく、*-ducali-*とある(5a5³)。すなわち、*t*ではなく *d*、ヴィラーマではなく *u* とあるのである。とすれば、その写本の読みに基づき、*-d uc<c>ali-*と、*c*を一つ補って *ca*を *cca*に修正するだけで(<>は筆者による補いを意味する)、この文脈により適しており一種の常套句である *uccalita* が得られることとなる。実際、チベット語訳の *gyen du* も、そもそも接頭辞 *ut-*の訳語である。

なお、Pradhan 本 (P. Pradhan, *Abhidharma-samuccaya of Asanga*, Santiniketan: Visva-Bharati, 1950) は著者による恣意的な梵本推定の側面が強いため顧みられないことが多いが、時にそれは妥当ではない。この箇所についても従来の研究では残念ながら一顧だにされていないのだが、同書(10.22)には *bhavāgrād uccalitasya* とある。

ちなみに、AS のこの箇所は、『五位七十五法』p. 171 では *-tca-*とコンパウンドになっており、『五位百法』p. 233 では、*-t ca-*、『中観五蘊論』p. 251 では *-d ca-*と表記されている⁴。ヴィラーマを削除するのであれば連声 (*sandhi*) の都合で *-c ca-*となるはずであるのだが。ともかく、前二著の共編著者の一人として今回このように訂正案を示すことができ安堵している(以上 Horiuchi 2018 も参照)。

3 所依

AS では、「感受(受)」の説明に際し、以下のようにある。

vedanā kiṃ-karmikā/ trṣṇotpādopekṣā-karmikā.

「感受は何をはたらきとするのか。渴愛を生じることや、[心が] 平静であることをはたらきとする。」(和訳は『瑜伽師地論』16)

チベット語訳は、*tshor ba las ci byed ce na/ sred pa skye ba dang/ btang snyoms su 'jog pa'i las byed do//* (ibid., 17)、漢訳は、愛生所依為業 (T.30.291c9) である。

他方、『瑜伽論』の *Pañcaviññānakāyaśaṃprayukta-manobhūmiviniścaya* では、*tshor ba las gang dang ldan zhe na/ sred pa skyed pa dang/ btang snyoms su 'jog pa'i las can yin no//* (ibid., 17)、愛生所待為業 (T.30.601c29) とある。前者の漢訳には大正蔵で“依 = 待[㊦]、持[㊧]”という異読がある (<http://21dzk.1.u-tokyo.ac.jp/SAT/satdb2015.php?lang=en>, accessed on 27 June 2018)。他方、後者には異読がない。かくして、前者について「待」という異読を採用する可能性が考えられる。では、梵本との対応はどうか。「愛生」は明らかに *trṣṇotpāda* に対応するので、「所待」あるいは「所依」は、*upekṣā* に対応することとなる。ところで、上記2書と同じく玄奘訳である『俱舍論』に対する平川索引(大蔵出版)によれば、同論で玄奘はしばしば *apekṣā* を「待」もしくは「所持」(後者は *apekṣika* の訳)と訳すのである。かくして、『瑜伽論』で玄奘は *upekṣā* の代わりに *apekṣā* と、つまり、*trṣṇotpādopekṣā* の代わりに *trṣṇotpādāpekṣā* と読んだと想定される(なお、『瑜伽論』写本では確かに前者のようにあった)⁵。ところで、チベット語訳は *'jog pa* と、動詞が付加されている。*X-karmaka/karmikā* という場合に動詞が付され、*X* するという働きを持つ、という用例になることが多いので、その方が他の用例と合うか(以上 Horiuchi 2018 も参照)。

³ 写本情報は Frank Bandurski, “Übersicht über die Göttinger Sammlungen der von Rāhula Sāṅkrtyāyana in Tibet aufgefundenen buddhistischen Sanskrit-Texte” (*Funde buddhistischer Sanskrit-Handschriften, III*) (*Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden: Beiheft 5*), Göttingen, 1994, 9–126.)

⁴ 同書の本箇所に関連して2か所の誤植を指摘しておく、ASの本箇所の次の行には「*-pūrvakena*」という表記が見られ、その前のページ(p. 251)で『五蘊論』が引用される際にも同じ語が見られるが、正しくは *-pūrvakeṇa* である。

⁵ なお、『瑜伽論』玄奘訳の特色についての一考察として、Martin Delhey, “From Sanskrit to Chinese and Back Again: Remarks on Xuanzang’s Translations of the Yogācārabhūmi and Closely Related Philosophical Treatises”, *Cross-Cultural Transmission of Buddhist Texts: Theories and Practices of Translation*, edited by Dorji Wangchuk, Department of Indian and Tibetan Studies, Universität Hamburg, 2016, 51–79.

本稿での訂正案一覧

結語にかえて、本稿で提示した既存の校訂テキストに対する訂正案の一覧を提示しておく。

- TrBh, 42.22: viśeṣāprasaṅgāt > aviśeṣāprasaṅgāt (この前に関しては複数の修正可能性がある)
- AS, 18.25 (cf. 『五位七十五法』 p. 171, 『五位百法』 p. 233, 『中観五蘊論』 p. 251) :
bhavāgrāt* calitasya > bhavāgrād uccalitasya
- 愛生所依為業 (T.30.291c9) > 愛生所待為業

文献・略号 (紙幅の都合でその他は『五位百法』を参照)

TrBh	Hartmut Buescher, <i>Sthiramati's Triṅśikāvijñaptibhāṣya, Critical Editions of the Sanskrit Text and its Tibetan Translation</i> (Verlag der Österreichische Akademie der Wissenschaften). Wien, 2007.
PSVi	Jowita Kramer, <i>Sthiramati's Pañcaskandhakavibhāṣā: Part 1: Critical Edition</i> (Sanskrit Texts from the Tibetan Autonomous Region), Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, Wien, 2014.
Horiuchi Toshio, 2018:	“Two Ongoing Buddhist Database Projects: ITLR and Bauddhakośa”, 『第二屆徑山禪宗祖庭文化論壇論文集 下』 杭州徑山禪寺, 1004-1023.
『五位七十五法』	斎藤明他 『『俱舍論』を中心とした五位七十五法の定義的用例集—仏教用語の用例集 (パウツダコーシャ) および現代基準訳語集 1—』 インド学仏教学叢書 14, 山喜房佛書林, 東京, 2011.
『五位百法』	斎藤明他 『瑜伽行派の五位百法—仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集—パウツダコーシャ II』 インド学仏教学叢書 16, 山喜房佛書林, 東京, 2014.
『中観五蘊論』	宮崎泉 他 『中観五蘊論』における五位七十五法対応語—仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集—パウツダコーシャ IV』 インド学仏教学叢書 20, 山喜房佛書林, 東京, 2017.
『瑜伽師地論』	室寺義仁 他 『『瑜伽師地論』における五位百法対応語ならびに十二支縁起項目語』 インド学仏教学叢書 21, 山喜房佛書林, 東京, 2017.

『中観五蘊論』にもとづく仏教用語の定義的用例と現代語訳の検討

—五位七十五法対応語以外の重要語に関する研究成果の公開に向けて—

横山 剛

(日本学術振興会特別研究員)

1 七十五法対応語以外の重要語の分析

バウツダコーシャ・プロジェクトにおいて京都大学の宮崎研究班は中観派における仏教用語の定義的用例と現代語訳の検討に取り組み、その一環としてチャンドラキールティ (Candrakīrti, 600–650 年頃) の『中観五蘊論』 (*Madhyamakapañcaskandhaka*) に説かれる諸法の定義的用例と現代語訳の検討を進めてきた。そして研究の第一段階として同論に法として説かれる用語の中から「五位七十五法」として知られる七十五の用語について優先的に検討を行い、その成果を宮崎ほか [2017] として刊行した¹。宮崎研究班ではその後も『中観五蘊論』にもとづく諸法の定義的用例と現代語訳の検討を継続し、研究の次の段階として同論の法体系をなす用語の中から七十五法対応語以外の重要語について検討を行っている。ここでは宮崎班が現在取り組んでいる上述の研究について報告したい。

2 分析対象となる用語の選定

『中観五蘊論』の法体系を構成する用語の中から七十五法対応語以外の用語の分析を行うにあたって、宮崎班では「現代語訳の検討に資する定義が示される用語を分析の対象とする」という基準のもとで、以下に示す五十三語を分析対象として選定した²。なお、宮崎ほか [2017] で七十五法対応語を分析した場合と同じく、便宜上、この五十三語にも通し番号を付す。ただし、現

在取り組んでいる研究では七十五法対応語の分析に引き続いてこれらの用語を分析するので、76 より始まる通し番号を付すものとする。

76. bhūta / mahābhūta, 77. pṛthivī-dhātu, 78. ab-dhātu, 79. tejo-dhātu, 80. vāyu-dhātu, 81. bautika / upādāya-rūpa, 82. nirvid, 83. prāmodya, 84. apraśrabdhi, 85. vimukti, 86. kuśala-mūla, 87. amoha, 88. akuśala-mūla, 89. avyākṛta-mūla, 90. saṃyojana, 91. anunaya, 92. māna, 93. atimāna, 94. māna-atimāna, 95. asmi-māna, 96. abhimāna, 97. mithyā-māna, 98. ūna-māna, 99. satkāya-dṛṣṭi, 100. antagrāha-dṛṣṭi, 101. mithyā-dṛṣṭi, 102. dṛṣṭi-parāmarśa, 103. śīlavrata-parāmarśa, 104. bandhana, 105. anuśaya, 106. upakleśa, 107. paryavasthāna, 108. āsrava, 109. ogha, 110. yoga, 111. upādāna, 112. grantha / kāya-grantha, 113. nivarana, 114. dharma-jñāna, 115. anvaya-jñāna, 116. paracitta-jñāna, 117. saṃvṛti-jñāna, 118. duḥkha-jñāna, 119. samudaya-jñāna, 120. nirodha-jñāna, 121. mārga-jñāna, 122. kṣaya-jñāna, 123. anutpāda-jñāna, 124. *sthāna-pratilābha, 125. *vastu-pratilābha, 126. *āyatana-pratilābha, 127. *pratyaaya-asāmagrī, 128. *pratyaaya-sāmagrī

本来ならば『中観五蘊論』の法体系を構成する七十五法対応語以外のすべての用語について分析を行うのが理想的であるが、後で述べるようにいくつかの用語についてはその下位要素が列挙されるだけなど現代語訳

¹ 宮崎班のこれまでの研究の方針については、拙稿 [2015b] を参照。宮崎ほか [2017] の出版報告としては、宮崎 [2017] を参照されたい。バウツダコーシャ・プロジェクトにおける『中観五蘊論』にもとづくその他の研究に BPT [2014] の第四章、拙稿 [2017b] がある。また筆者は宮崎班の研究と並行して『中観五蘊論』のテキスト研究と思想研究に取り組んでおり、成果の一部を巻末の「研究一覧」に示した拙稿 [2014c] をはじめとする論文として発表した。

² 本来は『中観五蘊論』の法体系を示し、その中でこれらの分析対象となる用語を強調して示すことで、同論の法体系におけるこれらの用語の位置を示すのが理想的である。しかし、紙幅の都合上、ここでは分析対象となる用語を法体系から抜き出して列挙する。同論の法体系については、宮崎ほか [2017] pp. xxiv–xxv を参照されたい。

の検討に資する定義がなされないものもある。このような理由から『中観五蘊論』の法体系を構成する七十五法対応語以外の用語の中から現代語訳の検討に資する定義が示される用語を選んで分析の対象とする。

以上では現代語訳の検討に資する定義がなされるか否かを分析対象の選定基準とすると述べたが、「現代語訳の検討に資する定義」というものがいかなるものであるのかを明確にしておく必要がある。『中観五蘊論』における諸法の定義をみると、その大半が以下に示す四つの形式のいずれかであるか、あるいはそれらを組み合わせたものであることがわかる。

形式 A 具体的な性質や機能の提示

形式 B 下位要素の列挙

形式 C 実体 (dravya) の数の提示

形式 D 語源解釈や比喩的な解説

形式 A の定義は法の性質や機能を直接的に示すものであり、これまでバウッダコーシャ・プロジェクトにおいて現代語訳の検討をする際に主に用いられてきたのはこのかたちの定義である。つまり、形式 A の定義が示される法については、現代語訳の検討が基本的には可能であるといえる。一方、形式 B や形式 C の定義はそれぞれアビダルマにおいて諸法が定義される際の形式のひとつであることは確かであるが、このかたちの定義からだけではその法の現代語訳を提案すること

は難しい。最後に形式 D の定義については、語源解釈や比喩的な解説によって定義対象である法の性質や機能が間接的に示されており、法の名称そのものの意味と合わせて考えるならば、現代語訳の検討に資するものであるといえる。つまり、形式 A の定義が示されなくても、形式 D の定義を含むならば、その法の現代語訳を検討することが可能である。先に分析対象として示した五十三法の中で以下の十四法については、形式 A の定義は説かれませんが、形式 D の定義を含む。

86. kuśāla-mūla, 88. akuśāla-mūla, 89. avyākṛta-mūla, 90. saṃyojana, 104. bandhana, 105. anuśaya, 106. upakleśa, 107. paryavasthāna, 108. āsrava, 109. ogha, 110. yoga, 111. upādāna, 112. grantha / kāya-grantha, 113. nivarāṇa

以上の十四法以外の法については、形式 A の定義がなされる。このような状況をうけて、宮崎班では形式 A の定義が示される法だけでなく、形式 D の定義を含む法についても、分析の対象に加えた。

3 用語の分析例

続いてこれらの五十三語の分析について例を挙げて示す。ここでは 108. āsrava の項目 (暫定版) を例に、上で述べた形式 D の定義を含む用語の分析について紹介したい。

108. āsrava

【参考】 柏原 [1978], 榎本 [1978] [1979] [1983].

Madhyamakapañcaskandhaka

【訳例】 漏れ

【チベット語訳】 zag pa

【定義的用例】

〔和訳〕

漏れは、すなわち、三つの**漏れ**である。欲望の漏れ、生存の漏れ、無知の漏れである。

その中で、無知 (→ 33. avidyā) を除いた欲〔界〕に属するその他の煩惱に十の纏わりつくもの

(→ 107. paryavasthāna) を加えたものが欲望の漏れであると知るべきである。〔すなわち〕四十一の実体である。色〔界〕と無色〔界〕に属する随眠^(*) (→ 105. anuśaya) であり、無知を除いた五十二の実体が生存の漏れである。では、いかなる理由で色〔界〕と無色〔界〕に属する随眠^(*) をまとめて生存の漏れとしたのか。その二つともが善でも不善でもなく (無記)、内面に向かい〔働〕き、精神集中している段階に属するものであるという三つの等しい性質の故に、一つにしたのである。三界の十五の無知が無知の漏れである。いかなる理由でこれを別に設けたのか。それがあらゆる煩惱の根本であるが故に、他ならぬ**漏れ**として別に設けた。…

… **漏れ**とは輪廻へと漏れることである¹⁾。有頂〔天〕から無間〔地獄〕に至るまで、〔心身の〕六つの領域 (六内処) という傷から漏れ出るから、あるいは〔心の〕連続を対象に向かって漏れ出させるから**漏れ**である。

¹⁾〔チベット語訳〕の脚注 b に示した『俱舍論』の解説における āsayanti saṃsāre という一節に注目すれば、『中観五蘊論』の原文もそれと同じ語源解釈による説明であったという可能性も考えられる。その場合、和訳は「漏れ (āsrava) とは輪廻に留まらせること (√ ās) である」となる。上述の語源解釈の可能性を考慮に入れつつも、ここでは『中観五蘊論』のチベット語訳にそった和訳を示すものとする。

〔チベット語訳〕

zag pa ni 'di ltar zag pa gsum ste / 'dod pa'i zag pa dañ /¹⁾ srid pa'i zag pa dañ / ma rig pa'i zag pa'o //

^{a...}de la ma rig²⁾ pa ma gtogs³⁾ pa 'dod pa na spyod pa'i ñon moñs pa g'zan kun nas dkris pa bcu dañ bcas pa ni 'dod pa'i zag par rig par bya ste /⁴⁾ rdzas b'zi bcu rtsa gcig go // gzugs dañ gzugs med pa na spyod pa'i phra rgyas ma rig pa ma gtogs pa rdzas lña bcu rtsa gñis ni srid pa'i zag pa'o // yañ rgyu gañ gis /⁵⁾ gzugs dañ⁵⁾ gzugs med pa na spyod pa'i phra rgyas rnambs bsdoms nas srid pa'i zag par byas še na / de gñi ga yañ luñ du ma bstan⁶⁾ pa dañ / kha nañ du bltas pa dañ / mñam par g'zag⁷⁾ pa'i sa pa yin pa'i /⁸⁾ chos mtshuñs pa ñid gsum gyis gcig tu byas so // khamsgsum pa'i ma rig pa bco lña ni ma rig pa'i zag pa'o // rgyu gañ gis 'di⁹⁾ logs śig tu b'zag¹⁰⁾ ce na 'di ltar de ñon moñs pa thams cad kyi rtsa bar gyur pa des na zag pa ñid du logs śig tu b'zag¹¹⁾ go //¹²⁾ ...^a

... ^{b...}zag pa ni 'khor bar zag pa ñid de / srid pa'i rtse mo nas mnar med pa'i bar du skye mched drug gi rma nas 'dzag pa'i phyir ram / rgyud¹³⁾ yul rnam la¹⁴⁾ 'dzag par byed pas zag pa'o //^b

¹⁾ om. GNP ²⁾ rigs P ³⁾ gtags N ⁴⁾ om. CD ⁵⁾ emended. om. CDGNP ⁶⁾ bltan N ⁷⁾ b'zag N

⁸⁾ CD insert phyir. ⁹⁾ om. GNP ¹⁰⁾ g'zag CD ¹¹⁾ g'zag CD ¹²⁾ om. N ¹³⁾ rgyu CD ¹⁴⁾ las CD

^a AKBh ad V. 35–36: tatra tāvat

kāme saparyavasthānāḥ kleśāḥ kāmāsravo vinā /

mohena V. 35abc

avidyāṃ varjayitvānye kāmāvacarāḥ kleśāḥ saha paryavasthānaiḥ kāmāsravo veditavya ekacatvāriṃśad dravyāni / ekatriṃśad anuśayāḥ pañcaprakārām avidyāṃ hitvā daśa paryavasthānāni /

anuśayā eva rūpārūpye bhavāsravaḥ // V. 35cd

vinā moheneti vartate / rūpārūpyāvaca¹⁾ avidyāvarjyā anuśayā bhavāsravo dvāpañcāśad

dravyāni / rūpāvacarāḥ ṣaḍviṃśatir anuśayāḥ pañcaprakārām avidyām hitvā / ārūpyāvacarāḥ
ṣaḍviṃśatīḥ / nanu ca tatrāpy asti paryavasthānadvayaṃ styānam auddhatyaṃ ca / *Prakaraṇeṣu*
coktaṃ bhavāsravaḥ katamaḥ / avidyām sthāpayitvā yāni tadanyāni rūpārūpyapratisamyuktāni /
saṃyojanabandhanānuśayopakleśaparyavasthānānīti / kasmād iha tasyāgrahaṇam / asvātantryād iti
kāsmīrāḥ / kiṃ punaḥ kāraṇam rūpārūpyāvacarā anuśayāḥ samasyaiko bhavāsrava²⁾ uktaḥ /

avyākṛtāntarmukhā hi te samāhitabhūmikāḥ /

ata ekīkṛtāḥ V. 36abc

te hy ubhaye 'py avyākṛtā antarmukhapravṛttāḥ samāhitabhūmikāś ceti trividhena sādharmaṇeṇaikī-
kṛtāḥ³⁾ / yenaiva ca kāraṇena bhavarāga uktas, tenaiva bhavāsravaḥ ity avidyedānīm traidhātuky
avidyāsrava iti siddham / tāni pañcadaśa dravyāni / kiṃ kāraṇam asau pṛthag vyavasthāpyate / sarveṣāṃ
hi teṣāṃ

mūlam avidyety āsravaḥ pṛthak // V. 36cd

¹⁾ emended. *rūpārūpyāvarā* in Pradhan's first and second editions. See 小谷・本庄 [2007] (p. 175, note
1). ²⁾ emended. *bhavāgra* in Pradhan's first and second editions. See 小谷・本庄 [2007] (p. 175, note
4). ³⁾ *sādharmaṇeṇaikatāḥ* in Pradhan's first and second editions. See 小谷・本庄 [2007] (p. 175, note 5).
(p. 306, l. 5–p. 307, l. 1, cf. 小谷・本庄 [2007] pp. 172–173)

^b AKBh ad V. 40: āsayanti saṃsāre āsravanti bhavāgrād yāvad avīcim ṣaḍbhir¹⁾ āyatanavraṇair
ity āsravāḥ / ... evaṃ tu sādhiyāḥ syād / āsravaty ebhiḥ saṃtatir viṣayeṣv ity āsravāḥ /
tadyathā āyusmanto naur mahadbhir abhisamskāraiḥ pratisroto nīyate / sā teṣāṃ eva saṃskāraṇāṃ
pratiprasabdhyā²⁾-alpakṛchreṇānusrota uhyata iti sūtravādānusārāt / ¹⁾ emended. *ṣaṅbhir* in Pradhan's
first edition. See his second edition (p. 308, l. 16) and 小谷・本庄 [2007] (p. 186, note 3). ²⁾ emended.
gratiprasavdhyā in Pradhan's first edition, and *pratiprasavdhyā* in his second edition. See 小谷・本庄
[2007] (p. 186, note 4) (p. 308, ll. 15–19, cf. 小谷・本庄 [2007] p. 183)

AKVy: *āsayanti saṃsāra ity āsravā ity / nairukto vidhiḥ / āsanārtho vā / āsravanti bhavāgrād*
yāvad avīcim ity / ṣaḍbhir āyatanavraṇaiś caḥsurādibhir āyatanair vraṇabhūtair āsravanti kṣaraṃti /
bhavāgrād yāvad avīcim gacchaṃti / bhavāgrāvitarāgasyāpy avīcikkakleśasamudācārāt tadutpannasya vā
tatrotpattisambhavāt / ka āsravanti / anuśayāḥ / āsravantiṭy āsravā ity acpratyayaḥ / (p. 488, ll. 8–13,
cf. 小谷・本庄 [2007] pp. 184–185)

(C 259b3–6, 260a6–7, D 263a2–4, 263b4–5, G 360a3–b1, 361a3–4, N 290b4–291a1, 291b2–3, P
301a8–b5, 302a5–6; LINDTNER [1979] p. 137, l. 27–p. 138, l. 8, p. 139, ll. 7–10, Zh, vol. 60, p.
1591, l. 19–p. 1592, l. 9, p. 1593, ll. 13–15)

参考文献 (1)

Munimatālamkāra

【原語】 āsrava

【チベット語訳】 zag pa

【定義的用例】

〔原文〕

āsraṅvās trayah kāmabhavāvidyāsraṅvāḥ / tatrāvidyāṃ vinānye kāmāvacarāḥ kleśāḥ saha
daśabhiḥ paryavasthānaiḥ kāmāsravaḥ / rūpārūpyāvacarā avidyāvarjā anuśayā evāvyaḥkṛtā
antarmukhapravṛttāḥ samāhitabhūmikā bhavāsravaḥ / avidyā traidhātukī avidyāsravaḥ / iyaṃ
ca sarvakleśānāṃ mūlabhūtā / ataḥ pṛthag vyavasthāpitā //

āsraṅvanti bhavāgrād avīcim śaḍbhir āyatanavraṅair iti vāsravaty ebhiḥ santatir viśaye
tiṣṭhati vety āsravaḥ // (李・加納 [2015] p. 31, ll. 6–12)

〔チベット語訳〕

zag pa rnam¹⁾ gsum ste 'dod pa daṅ srid pa daṅ ma rig pa'i zag pa'o // de la ma rig pa²⁾ ma gtogs
pa g'zan 'dod pa na³⁾ spyod pa'i ṅon moṅs pa kun nas dkris pa bcu daṅ bcas pa rnam ni 'dod pa'i
zag pa'o // ma rig pa bor ba'i phra rgyas ṅid gzugs daṅ gzugs med pa na spyod pa luṅ du ma bstan
pa kha naṅ du bltas nas 'jug pa mñam par g'zag pa'i sa rnam ni srid pa'i zag pa'o // kham gsum
pa'i ma rig pa ni ma rig pa'i zag pa'o // 'di ni ṅon moṅs pa thams cad kyi rtsa bar gyur pa ste de'i
phyir logs su⁴⁾ rnam par b'zag⁵⁾ go //⁶⁾

srid pa'i rtse mo nas mnar med pa'i bar du skye mched drug gi rma nas⁷⁾ 'dzag pa'i phyir ram
'di rnam kyi zag par byed pa'am rgyud yul la gnas par byed pa'i phyir zag pa'o //

¹⁾ rnam CD ²⁾ pas NP ³⁾ ni C ⁴⁾ par GNP ⁵⁾ g'zag CD ⁶⁾ / GN, om. P ⁷⁾ gnas N

(C 133b7–134a3, D 134a6–b1, G 211b6–212a3, N 155a5–b1, P 160b3–7; AKAHANE and
YOKOYAMA [2015] p. 111, l. 18–p. 112, l. 7, 磯田 [1991] p. 7, ll. 6–14, Zh, vol. 63, p.
1204, l. 20–p. 1205, l. 8)

【先行研究における翻訳】

〔原文からの和訳〕

漏は三種である。欲漏と有の漏と無明漏である。その中で、欲漏とは、無明を除外した、その他の欲
界の煩惱で、十纏をあわせたものである。有の漏とは、色界と無色界の、無明以外の、随眠にほかな
らず、無記であり、内に向かって生起し（内門転）、三昧の地に属するものである。無明漏とは、三
界所属の無明である。そしてそれ（無明）は、あらゆる煩惱にとっての根本となっている。だから個
別に〔漏として〕規定されるのである。

六種の処という傷によって、有頂から無間〔地獄〕に至るまで漏れ出るから、あるいは、これら
（欲と有と無明との漏）によって相続が境に対して漏れ出るから、または留まるから、「漏」である。

(李ほか [2016] pp. 66–67)

参考文献 (2)

Abhidharmāvatāra

【チベット語訳】 zag pa

【漢訳】 漏

【定義的用例】

〔チベット語訳〕

zag pa ni gsum ste 'dod pa'i zag pa dañ / srid pa'i zag pa dañ / ma rig pa'i zag pa'o //

de la 'dod pa na spyod pa'i ma rig pa ma gtogs pa gžan 'dod par gtogs pa'i ¹⁾ ñon moñs pa kun nas dkris te 'dug pa dañ bcas pa rdzas bži bcu rtsa gcig po gañ yin pa 'di ni 'dod pa'i zag pa ste ma rig pa lña ma gtogs pa / phra rgyas sum cu rtsa gcig dañ kun nas dkris te 'dug pa bcu'o // gzugs dañ gzugs med pa'i ma rig pa ma gtogs pa'i phra rgyas kun nas dkris te 'dug pa dañ bcas pas ²⁾ rdzas lña bcu rtsa bži ni ³⁾ srid pa'i zag pa ste / gzugs su gtogs pa'i phra rgyas ñi śu rtsa drug dañ / de bžin du gzugs med pa'i dañ / rmugs pa dañ rgod pa'o // luñ du mi ston par mtshuñs pa dañ nañ du bltas ⁴⁾ par gyur pa dañ ⁵⁾ mñam par bžag ⁶⁾ pa'i sa pa yin pa'i phyir khams gñis nas skyes pa gcig tu bsdu so // khams gsum pa'i ma rig pa bco lña ni ma rig pa'i zag pa'o //

khams gsum du 'jog ste mya ñan las 'da' ba'i bar chad byed pa'i phyir **zag pa** dañ / srid pa'i rtse mo nas mnar med pa'i bar dag tu skye mched drug gi sgo nas zag pas **zag pa'o** //

¹⁾ CD insert /. ²⁾ sic read *pa*. ³⁾ CD insert /. ⁴⁾ *ltas* GNP ⁵⁾ CD insert /. ⁶⁾ *gžag* CD

(C 313a2-6, D 312a1-5, G 505a4-b3, N 415a5-b3, P 404a8-b5; DHAMMAJOTI [2008] p. 235, ll. 12-32, Zh, vol. 82, p. 1573, ll. 3-17)

〔漢訳〕

漏有三種。謂欲漏、有漏、無明漏。

欲界煩惱并纏除無明名欲漏。有四十一物。謂三十一隨眠并十纏。色無色界煩惱并纏除無明名有漏。有五十四物。謂上二界各二十六隨眠。并惛沈掉舉同無記故、内門轉故、依定地故、二界合立一有漏名。三界無明名無明漏。有十五物以無明是諸有本故、別立漏等。

稽留有情、久住三界、障趣解脫。故名爲**漏**。或令流轉從有頂天至無間獄。故名爲**漏**。或彼相續於六瘡門泄過無窮。故名爲**漏**。(T, vol. 28, 984b27-c7)

【先行研究における翻訳と訳例】

〔チベット語訳からの和訳〕

漏 āsrava は三であって、欲漏・有漏・無明漏である。

その中、(1) 欲〔界〕繫 *kāmāvacara* の無明を除いた他の欲〔界〕に属する *kāma-paryāpanna* 煩惱ならびに纏なる四十一物 *dravya* なるものが欲漏であって、五無明を除いた三十一隨眠と十纏とである。(2) 色・無色の無明を除いた隨眠ならびに纏なる五十四物は有漏 *bhavāsrava* であって、色〔界〕に属する二十六隨眠と、同様に無色〔界〕の〔二十六〕と、惛沈と掉舉とである。〔これらは〕ひとしく無記であり、また、〔同じく〕内に向ってはたらき、〔おなじく、心が〕三昧に入った *samāhita* 地 *bhūmi* に属するから、〔色・無色の〕二界より生ずる〔煩惱〕をひとまとめにして〔有漏と呼ぶのである〕。(3) 三界の十五無明が無明漏である。

三界においてはたらき涅槃のさまたげをなすから**漏**であり、有頂 *bhavāgra* 〔天〕から無間 *avīci* 〔地獄〕まで六処の門によって漏れるから**漏**といわれる。(櫻部 [1997] p. 217)

〔漢訳からの英訳〕 outflow

There are three kinds of **outflows** (*āsrava*): sensuality outflow (*kāmāsrava*), existence outflow (*bhavāsrava*) and ignorance outflow (*avidyāsrava*).

The sensuality outflow consists of all the defilements and envelopments in the sense-sphere, with the exception of ignorance. There are altogether forty-one entities (*dravya*), namely: thirty-one proclivities and ten envelopments. The existence outflow consists of all the defilements and envelopments in the fine-material and immaterial spheres, with the exception of ignorance. There are altogether fifty-four entities, namely: twenty-six proclivities [—thirty-one proclivities less five forms of *moha* —] in each of the two upper spheres, as well as torpor and restlessness. The name existence outflow is given to the [defilements of the] two [upper] spheres collectively, because they all (i) are morally non-defined (*avyākṛtatvāt*), (ii) operate inwardly (*antarmukha-pravṛttatvāt*) and (iii) pertain to the stage of concentration (*samāhitabhūmikātvāt*). The ignorance outflow consists of all the ignorance in the three spheres. There are altogether fifteen entities, [namely, the ignorance belonging to each of the five classes of abandonables, in each of the three spheres]. Ignorance is separately classified as an outflow etc., as it is the root (*mūla*) of all forms of existence.

The **outflows** are so named because they keep (*āsayanti*) beings for a long time in the three spheres of existence, [thus] hindering their progress towards liberation. Or, because they cause beings to flow round (*āsravanti*) from the highest plane of existence (*bhavāgra*) to [the lowest], the Avīci hell. Or, because they incessantly discharge (*kṣar*) inexhaustible impurities through the six wound-like entrances [—the six sense faculties —] of beings (*ṣadbhir āyatanavranaiḥ*).

(DHAMMAJOTI [2008] pp. 97–98)

〔漢訳からの仏訳〕 impur

Les **impurs** (*āsrava*) sont trois : l'impur sensuel (*kāmāsrava*), l'impur existentiel (*bhavāsrava*) et l'impur d'ignorance (*avidyāsrava*).

Les souillures du monde du désir, plus les enveloppements, moins l'ignorance, sont ce qu'on appelle l'impur sensuel. Il y en a quarante et une, à savoir trente et un résidus latents et les dix enveloppements (*avidyāṇi varjayitvā 'nye kāmāvacarāḥ kleśāḥ saha paryavasthānaiḥ kāmāsravo veditavya ekacatvāriṃśad dravyāṇi ekatriṃśad anuśayā daśa paryavasthānāni*). Les souillures du monde de la matière subtile et du monde immatériel jointes aux enveloppements, abstraction faite de l'ignorance, sont appelées l'impur existentiel (*rūpārūpyāvacarā avidyāvarjyāḥ kleśāḥ saha paryavasthānair bhavāsravaḥ*). Elles sont cinquante-quatre, soit vingt-six résidus latents dans chacun des deux mondes supérieurs, plus la langueur et l'excitation (*catuḥpañcādaśad dravyāṇi rūpāvacarāḥ ṣadvimśatir anuśayā ārūpyāvacarāḥ ṣadvimśatiḥ saha styānauddhatyābhyām*). Comme elles sont toutes également indéterminées et introverties et qu'elles s'appuient sur des terres de recueillement, leur ensemble dans les deux mondes supérieurs porte un seul nom : celui d'impur existentiel (*te hy ubhaye 'py avyākṛtā antarmukhapravṛttāḥ samāhitabhūmikāścety ekatāḥ*). L'ignorance répandue dans le triple monde est dite impur d'ignorance. Il y en a quinze

sortes. C'est en considérant l'ignorance comme origine de l'existence qu'on la particularise en tant qu'impur (*traidhātuky avidyety avidyāsravas / tāni pañcadaśadravyāṇi / sarveṣāṃ hi teṣāṃ mūlam avidyety āsravaḥ pṛthagvyavasthāpyate*).

On parle des «impurs» (*āsrava*) en tant que ces derniers assignent longtemps les êtres à résidence dans le triple monde (*āsayanti traidhātuke*), font obstacle à la vue de la délivrance (*mokṣagame antarāyā*), coulent depuis le ciel du sommet de l'existence jusqu'à l'enfer sans intervalle (*āsravanti bhavāgrād yāvad avīcim*) et font en sorte que les séries se prolongent inépuisablement par les six blessures (*ṣaḍbhir āyatanavraṇaiḥ*).

(VELTHEM [1977] pp. 37-38)

参考：九十八随眠と漏の関係

		貪	瞋	無明	慢	疑	有身見	辺執見	邪見	見取	戒禁取		
欲界	見苦所断	○	○	△	○	○	○	○	○	○	○	10	36
	見集所断	○	○	△	○	○			○	○		7	
	見滅所断	○	○	△	○	○			○	○		7	
	見道所断	○	○	△	○	○			○	○	○	8	
	修所断	○	○	△	○							4	
色界	見苦所断	◎		△	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	9	31
	見集所断	◎		△	◎	◎			◎	◎		6	
	見滅所断	◎		△	◎	◎			◎	◎		6	
	見道所断	◎		△	◎	◎			◎	◎	◎	7	
	修所断	◎		△	◎							3	
無色界	見苦所断	◎		△	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	9	31
	見集所断	◎		△	◎	◎			◎	◎		6	
	見滅所断	◎		△	◎	◎			◎	◎		6	
	見道所断	◎		△	◎	◎			◎	◎	◎	7	
	修所断	◎		△	◎							3	

- : 九十八随眠
- : 欲漏 無明を除く欲界繫の 31 随眠に 10 纏を加えたもの (41 法)
- ◎ : 有漏 無明の除く色界繫と無色界繫の随眠 (52 法)
- △ : 無明漏 三界繫の無明 (15 法) 漏の合計 108 法

(※) 105. *anuśaya* の項目については、現時点で宮崎班において検討を進めている最中のため、ここでは暫定的に「随眠」という漢訳語を用いた。

『中観五蘊論』が示す定義の分析を中心にすえて『牟尼意趣莊嚴』と『入阿毘達磨論』から情報を補足するという分析の基本的な方針は、宮崎ほか [2017] において七十五法対応語を分析した際の方針と同じである。『牟尼意趣莊嚴』と『入阿毘達磨論』を用いる意義など、分析方針の詳細については拙稿 [2015b]、宮崎ほか [2017] pp. iii–vii, xvii–xxii を参照されたい。宮崎ほか [2017] とは異なる本研究の新たな方針としては、関連する先行研究の参照を示した点がある。これまでの研究では七十五法対応語を分析してきたが、これらの用語についてはすでにバウツダコーシャ・プロジェクトにおいて研究の蓄積があり、宮崎ほか [2017] では見出し語の下に斎藤ほか [2011] [2014]、榎本ほか [2014] (順に有部の七十五法、瑜伽行派の百法、パーリ文献の七十五法対応語を分析する研究) の参照を示した。しかし、現在取り組んでいる研究では七十五法対応語以外の重要語を検討するという点で、バウツダコーシャ・プロジェクトにおいて未だ検討の対象になっていない用語も少なくない。したがって、宮崎班では同プロジェクトの研究成果に限らず、定義の分析や現代語訳の検討に資する当該の用語に関する先行研究を【参考】として冒頭の見出しの直後に示した。また宮崎ほか [2017] では、『中観五蘊論』が示す七十五法対応語の定義において他の七十五法対応語への言及がある場合には、通し番号 (1～75) を付してその参照を示したが、現在進める研究においても、同論が示す七十五法対応語以外の重要語の定義において七十五法対応語ならびにそれ以外の重要語について言及がある場合には、宮崎ほか [2017] における研究成果も考慮に入れて、通し番号 (1～128) を付してその参照を示した。

続いて『中観五蘊論』における āsrava の定義の内容をみてみよう。冒頭では āsrava の三つの下位要素が列挙される (形式 B)。次にそれらの三つの āsrava の内容が九十八随眠との対応関係にもとづいて実体の数

という点から示される (形式 C)。そして最後に、六内処から漏れ出る (āsravati) から、あるいは心の相続を漏れ出させるから āsrava であるという比喩的な解説 (形式 D) が示される。『中観五蘊論』の āsrava の解説では、他の法の定義にみられるような具体的な性質や機能を直接的に示す解説 (形式 A) はみられない。また冒頭の下位要素の列挙や実体の数の提示からだけでは、現代語訳を検討することは難しい。しかし、最後に示される比喩的な解説は āsrava の性質や機能を間接的に示しており、現代語訳の検討に資するものである。さらにここでは実体の数という点からの三つの āsrava の定義を分かり易くするために、九十八随眠と三つの āsrava の対応関係を示した図を参考として末尾に示した。そして『中観五蘊論』における上述の定義と āsrava という語の意味から、宮崎班では āsrava に対して「漏れ」という現代語訳を提案した。

4 成果の公開に向けて

現在、宮崎班では隔週で研究会を開催し、『中観五蘊論』の法体系における七十五法対応語以外の重要語の分析を進めている。2018年7月の時点で分析対象として選んだ五十三語の中のおおよそ八割の分析を終えている。今後も作業を継続し、できる限り早い段階ですべての用語の検討を完了させることを予定している。一方、宮崎 [2017] p. v でも指摘した通り、『中観五蘊論』のチベット語訳には問題が多く、これまで検討をした箇所においても再検討が必要な箇所が残されている。『牟尼意趣莊嚴』や有部の諸論書などから幅広く原文を回収し、問題のあるこれらの箇所を再検討することも今後の課題としてあげられる。また以上の作業と並行して、今年度内に研究成果を刊行することを視野に入れて、現在取り組んでいる研究で得られた成果を一書にまとめることを計画している。

略号

AKBh	<i>Abhidharmakośabhāṣya</i>
AKVy	<i>Abhidharmakośavyākhyā</i>
BPT	BAUDDHAKOŚA PROJECT TEAM
C	Co ne edition of the Tibetan Tripiṭaka

D	sDe dge edition of the Tibetan Tripiṭaka
G	dGa' ldan manuscript of the Tibetan Tripiṭaka
N	sNar than edition of the Tibetan Tripiṭaka
P	Peking edition of the Tibetan Tripiṭaka
T	<i>Taishō Shinshū Daizōkyō</i> 『大正新脩大藏経』
Zh	Tibetan Tripiṭaka collected in the <i>Zhonghua Dazangjing</i> 『中華大藏経』

一次文献

Abhidharmakośabhāṣya

(Skt.) PRADHAN [1967].

(Jpn.) Chap. V : 小谷・本庄 [2007].

Abhidharmakośavyākhyā

(Skt.) WOGIHARA [1936].

Abhidharmāvatāra(Tib.) C *ñu* 303a5–324a7, D (4098) *ñu* 302a7–323a7, G (3598) *thu* 490b1–522a6, N (3590) *thu* 403b2–429a4, P [119] (5599) *thu* 393a3–417a8; DHAMMAJOTI [2008] pp. 208–275, Zh [82] (3327) pp. 1549–1604.

(Ch.) T, vol. 28, No. 1554, pp. 980–989, translated by Xuanzang 玄奘.

(Eng.) DHAMMAJOTI [2008] pp. 71–208.

(Fr.) VELTHEM [1977] pp. 1–79.

(Jpn.) 櫻部 [1997] pp. 182–241.

Madhyamakapañcaskandhaka(Tib.) C *ya* 236a7–263a7, D (3866) *ya* 239b1–266b7, G (3266) *ya* 326a–365b3, N (3258) *ya* 264a6–295a3, P [99] (5267) *ya* 273b6–305b5; LINDTNER [1979] pp. 95–145, Zh [60] (3095) pp. 1535–1605.*Munimatālaṃkāra* (Section of Sarvadharmā)

(Skt.) 李・加納 [2015].

(Tib.) C *a* 73a2–291b4, D (3903) *a* 73b1–293a7, G (3298) *ha* 66b2–415a5, N (3290) *ha* 66b2–415a5, P [101] (5299) *ha* 71b3–398b3; AKAHANE and YOKOYAMA [2014] [2015], ISODA [1984] [1987] [1991], Zh [63] (3132) pp. 1055–1828.

(Jpn.) 李ほか [2015] [2016].

研究一覧

AKAHANE, Ritsu and YOKOYAMA, Takeshi 赤羽律, 横山剛

[2014] “The Sarvadharmā Section of the *Munimatālaṃkāra*, Critical Tibetan Text, Part I: with Special Reference to Candrakīrti’s *Madhyamakapañcaskandhaka*”, 『インド学チベット学研究』 18, pp. 14–49.[2015] “The Sarvadharmā Section of the *Munimatālaṃkāra*, Critical Tibetan Text, Part II: with Special Reference to Candrakīrti’s *Madhyamakapañcaskandhaka*”, 『インド学チベット学研究』 19, pp. 97–137.

BAUDDHAKOŚA PROJECT TEAM バウツダコーシャ・プロジェクトチーム

[2014] 「śraddhā/saddhā の訳語をめぐって」, 『仏教文化研究論集』 17, pp. 3–64.

DHAMMAJOTI, Kuala Lumpur 法光

[2008] *Entrance into the Supreme Doctrine, Skandhila's Abhidharmāvatāra*, The University of Hong Kong, 2nd ed., Hong Kong. (1st ed., Colombo, 1998)

ENOMOTO, Fumio 榎本文雄

[1978] 「āsrava について」, 『印度學佛教學研究』 27-1, pp. 158–159.

[1979] 「āsrava (漏) の成立について」, 『佛教史學研究』 22-1, pp. 17–42.

[1983] 「初期仏典における (漏)」, 『南都仏教』 50, pp. 17–28.

ISODA, Hirofumi 磯田熙文

[1984] 「Abhayākaragupta 『Munimatālamkāra』 (Text) (I)」, 『東北大学文学部研究年報』 34, pp. 1–70.

[1987] 「Abhayākaragupta 『Munimatālamkāra』 (Text) (II)」, 『東北大学文学部研究年報』 37, pp. 1–39.

[1991] 「Abhayākaragupta 『Munimatālamkāra』 (Text) (III)」, 『東北大学文学部研究年報』 41, pp. 1–42.

KASHIWAHARA, Nobuyuki 柏原信行

[1978] 「「漏」に就いて」, 『印度學佛教學研究』 26-2, pp. 146–147.

LI, Xuezhū and KANŌ, Kazuo 李学竹, 加納和雄

[2015] 「梵文校訂『牟尼意趣莊嚴』第一章—『中觀五蘊論』にもとづく一切法の解説 (fol. 48r4–58v1) —」, 『密教文化』 234, pp. 7–44.

LI, Xuezhū, KANŌ, Kazuo and YOKOYAMA, Takeshi 李学竹, 加納和雄, 横山剛

[2015] 「梵文和訳『牟尼意趣莊嚴』—一切法解説前半部—」, 『インド学チベット学研究』 19, pp. 138–157.

[2016] 「梵文和訳『牟尼意趣莊嚴』—一切法解説後半部—」, 『インド学チベット学研究』 20, pp. 53–75.

MIYAZAKI, Izumi 宮崎泉

[2017] 「『『中觀五蘊論』における五位七十五法対応語』の出版を終えて」, *Buddhakośa Newsletter* 6, pp. 9–12.

MIYAZAKI, Izumi *et al.* 宮崎泉ほか

[2017] 『『中觀五蘊論』における五位七十五法対応語—仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集—バウツダコーシャ IV』, 山喜房佛書林, 東京.

ODANI, Nobuchiyo and HONJŌ, Yoshifumi 小谷信千代、本庄良文

[2007] 『俱舍論の原典解明 随眠品』, 大蔵出版, 東京.

PRADHAN, Prahlad

[1967] *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu*, Tibetan Sanskrit Works Series 8, Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, Patna, First ed. (2nd ed. 1975)

SAKURABE, Hajime 櫻部建

[1997] 「附篇『入阿毘達磨論』(チベット文よりの和訳)」, 『増補版 佛教語の研究』, 文栄堂書店, 京都, pp. 184–241.

VELTHEM, Marcel van

- [1977] *Le traité de la descente dans la profonde loi (Abhidharmāvatārasāstra) de l'Arhat Skandhila*, Publications de l'Institut orientaliste de Louvain 16, Université catholique de Louvain, Institute orientaliste, Louvain-la-Neuve.

WOGIHARA, Unrai 荻原雲来

- [1936] *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā by Yaśomitra*, 山喜房佛書林, 東京.

YOKOYAMA, Takeshi 横山剛

- [2014] 「『牟尼意趣莊嚴』(Munimatālaṃkāra)における一切法の解説—月称造『中観五蘊論』との関連をめぐって—」, 『密教文化』233, pp. 51-77.
- [2015a] “A Reconstruction of the Sanskrit Title of Candrakīrti's *Phuṅ po lña'i rab tu byed pa*: with Special Attention to the Term “*rab tu byed pa*””, 『印度學佛教學研究』63-3, pp. 208-212.
- [2015b] 「中観派における術語の定義的用例と現代語訳の検討—『中観五蘊論』に基づく研究成果の公開に向けて—」, *Bauddhakośa Newsletter* 4, pp. 3-9. (公開 URL: http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~b_kosha/pdf/news_letter_004.pdf)
- [2015c] 「『中観五蘊論』における諸法解説の性格—無我説との関係をめぐって—」, 『密教文化』235, pp. 89-114.
- [2016a] “An Analysis of the Textual Purpose of the *Madhyamakapañcaskandhaka*: With a Focus on its Role as a Primer on Abhidharma Categories for Buddhist Beginners”, 『印度學佛教學研究』64-3, pp. 164-168.
- [2016b] 「『中観五蘊論』の思想的背景について—『五蘊論』ならびに『入阿毘達磨論』との関係についての再考察—」, 『真宗文化』25, pp. 23-42.
- [2016c] 「『中観五蘊論』の著者について—月称部分著作説の再考察—」, 『密教文化』237, pp. 71-100.
- [2017a] “An Analysis of the Conditioned Forces Dissociated from Thought in the *Madhyamakapañcaskandhaka*”, 『印度學佛教學研究』65-3, pp. 177-182.
- [2017b] 「中観派における *prajñā* の定義的用例: 『中観五蘊論』に基づく訳語の検討」, 『仏教文化研究論集』18・19 合併号, pp. 59-74.
- [2017c] 「『中観五蘊論』に説かれる有部説の帰属をめぐって」, 『密教文化』239, pp. 27-46.
- [2018a] “The Relationship between the *Madhyamakapañcaskandhaka* and the *Ratnāvalī*: With a Focus on the Parallel Passages in the Definitions of the Defiled Elements”, 『印度學佛教學研究』66-3, pp. 135-140.
- [2018b] 「論の構成からみた『中観五蘊論』と『入阿毘達磨論』の関係—諸法の体系に付随して説かれる教理に注目して—」, 『国際仏教学大学院大学研究紀要』22, pp. 21-62.

スタッフ

研究代表者

齋藤 明
(国際仏教学大学院大学・教授)
「総括+インド大乘仏教論書」

研究分担者 (9)

榎本 文雄
(大阪大学文学研究科・教授)
「パマリ仏教関連術語」

下田 正弘
(東京大学人文社会系研究科・教授)
「大乘仏教関連術語
+ 人文情報学関連情報の提供」

室寺 義仁
(滋賀医科大学医学部・教授)
「初期瑜伽行唯識思想関連術語」

佐久間 秀範
(筑波大学人文社会系・教授)
「インド・中国唯識思想関連術語」

宮崎 泉
(京都大学文学研究科・教授)
「中観思想関連術語」

山部 能宣
(早稲田大学文学学術院・教授)
「インド・中国禪思想関連術語」

種村 隆元
(大正大学仏教学部・准教授)
「インド・中国密教関連術語」

高橋 晃一

(東京大学人文社会系研究科・准教授)
「瑜伽行唯識思想関連術語
+ 研究成果の Web 公開」

石田 尚敬
(愛知学院大学文学部・講師)
「仏教論理学関連術語」

連携研究者 (9)

Charles Muller (東京大学人文社会系研究科・教授)

Dorji Wangchuk (Hamburg 大学・教授)

袁輪 顕量 (東京大学人文社会系研究科・教授)

石井 公成 (駒澤大学仏教学部・教授)

渡辺 章悟 (東洋大学文学部・教授)

桜井 宗信 (東北大学文学研究科・教授)

馬場 紀寿 (東京大学東洋文化研究所・准教授)

新作 慶明 (武蔵野大学経済学部・講師)

菊谷 竜太 (京都大学白眉センター・特定准教授)

研究協力者 (35)

Paul Harrison (Stanford 大学・教授)

Jonathan Silk (Leiden 大学・教授)

葉 少勇 (北京大学・副教授)

何 歆歆 (浙江大学・教授)

王 俊淇 (中国人民大学・講師)

鄭 祥教 (東国大学校(慶州)・専任研究員)

ツルティム・ケサン (大谷大学・名誉教授)

永崎 研宣 (人文情報学研究所・所長)

苦米地 等流 (人文情報学研究所・専任研究員)

堀内 俊郎 (齋藤研究班)

一色 大悟 (齋藤研究班)

崔 境眞 (齋藤研究班)

清水 尚史 (齋藤研究班)

楊 潔 (齋藤研究班)

王 楠 (齋藤研究班)

劉 暢 (齋藤研究班)

生野 昌範 (齋藤研究班)

河崎 豊 (榎本研究班)

名和 隆乾 (榎本研究班)

古川 洋平 (榎本研究班)

岡田 英作 (室寺研究班)

高務 祐輝 (室寺研究班)

中山 慧輝 (室寺研究班)

横山 剛 (宮崎研究班)

三代 舞 (山部研究班)

真鍋 智裕 (山部研究班)

佐々木 亮 (山部研究班)

佐藤 晃 (山部研究班)

林 慶仁 (山部研究班)

野武 美弥子 (山部研究班)

藤本 庸裕 (山部研究班)

道元 大成 (山部研究班)

倉西 憲一 (種村研究班)

大塚 恵俊 (種村研究班)

伊集院 栞 (齋藤/種村研究班)

Buddhakośa Newsletter no. 7 (2018年9月30日発行)

発行元：Buddhakośa プロジェクト

(The Development of Buddhakośa: A Treasury of Buddhist Terms and Illustrative Sentences 【Grant-in-Aid for Scientific Research (A)】)

〒112-0003

東京都文京区春日 2-8-9

国際仏教学大学院大学

齋藤科研費研究室

Email: office.buddhakosha@gmail.com

印刷 株式会社サンワ

Buddhakośa プロジェクトの研究成果は、以下の URL よりご覧いただけます。

http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~b_kosha/start_index.html